
魔法使いへ到る道

ぽぽろっか

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いへ到る道

【作者名】

ぽぽろっか

【あらすじ】

平凡な日常をただ生きていた男。男は不幸な事故で生き絶え、そして再び生を受けた。そして気づかされた真実。深い絶望と苦悩の末に、男が見つけ出した答えとは…？

P r e l u d e

俺は死んだ。スイーツ（笑）

……いやいやいや、違う違う違う。こんなしょうもないボケをする為だけに死んだんじゃない。いやできる事なら死にたくは無かったけど。

ともかく、俺は一度死に、そして転生したんだ。生まれ変わったと言ってもいい。生前の記憶を持ったまま子どもになったのだ。

最初はそりゃ驚いたさ。気がついたら体が縮んでるんだもの。4869のお菓を飲まされたのかと必死に記憶を探ったものだ。すぐに死んだことを思い出したけど。

あれは…そう、寒風が吹き始めた秋の夕暮れだった。俺は些細な行き違いから大喧嘩をしてしまった彼女を慌てて追いかけていたところだった。

彼女とは友人からの紹介で知り合った。友人の友人の友人らしい。本人の名誉のために言っておくが決して悪い子でもイヤな奴でもない。一人か二人密かに思いを寄せている男がいるかもというくらいにはいい子だった。

俺は別に好きじゃなかった。嫌いというわけでもなかった。が、友人からの強い勧めで付き合うことになった。そろそろ彼女いない暦Ⅱ年齢というのを卒業したかったのもある。向こうも似たような理由らしい。そうまでして俺たちをくつつけたかったのかね。

そんなこんなで付き合うことになった俺たちだったが、まあ成り行きで付き合っている以上そんな甘い展開になったりするはずもなく、清く正しい男女交際を続けていた。

そして何度目かのデートの時、喧嘩し憤った彼女が背を向けて歩

き去った。我に返った俺は彼女を追いかけた。

その時だった。横断歩道を渡りかけている俺の元へ、一切減速する様子の見られない一台の乗用車が向かってきたのは。フロントガラスの向こうのドライバーは居眠りをしていた。

空白になる思考。突然の事に体は動かず、ただ呆然と迫りくる鉄の塊を見ていた。

そして――俺は咄嗟の判断で大きく横に飛び地面を転がった。

ゴロゴロと転がりながらも、なんとか衝突を回避できたことを喜んだ。

――転がった先にあった蓋の開いたマンホールに落ちるまでは。……いや、さ。事前に知ってはいたんだよ？蓋が開いてるの。ちゃんと看板もあったし、バリケードも作ってあった。

でも、さっき言ったじゃん。頭が真っ白になったって。おまけに転がってたせいでバリケードの下潜り抜けちゃったし。

そうしてそのまま暗い穴の中を落下。よく覚えてないけどそのままグチャ。気がついたら子どもになっていた。

……全く意味がわからん。みんなもそう思うよね？

ただまあ、不幸中の幸いというべきなのは、以前の記憶が蘇ったのがこの体が五歳のときだったということだね。授乳とかオムツとかなにその羞恥プレイ。味わいたくねー。

不思議なことに両親は以前と変わらなかった。見飽きるほどに見てきた俺の父さんと母さんの顔。二人の名前も、俺の名前も変わってはいなかった。混乱しなくていいから助かるけど。

これはマジで幼児逆行かな、とも思ったけれど、近所の様子は全然違うし、テレビに映る内容も覚えの無いものばかりだったことから、過去を繰り返しているのではないと判断できた。

一体ここはどこなのか。なにより、俺はなぜこんな目に遭ってい

るのか。俺の身に何が起ったのか。疑問は尽きない。

けれど、俺にはそんなことがどうでもよく、ほんの些細なことに
思えるほどの、生前に残した大きな後悔があった。それを思うだけ
で身を斬られる様に辛く、目からは涙が溢れて来るほどだった。

本当に、本当に、悔しかった。心残りだった。死んでも死に切れ
なかった。

俺は。俺は。俺は。

俺は――

――童貞のまま死んでしまったんだッッッ！！！！

ちくしょう！ちくしょう！ちくしょう！

くそっ、なんで、どうしてこんなことになってしまったんだ！こ
んな最悪のバッドエンドにたどり着くなんて！回避する方法はいく
らでもあったんじゃないか！？

は？彼女がいただろ？だから言ったじゃねえか、清く正しい男女
交際だって。そんなことするわけねえじゃん。休日ちょっと一緒に
出かけてあちこち見て回ってそのままさよならする程度だったんだ
よ！キスすらしてないんだよ！

そのことに気づいたとき、俺は深い絶望に囚われた。泣きもせず、
喚きもせず、ただただ絶望するだけ。目に映る全てが灰色に見え、
聞こえる全ての音が濁って聞こえた。

でもある日気づいたんだ。確かに俺は童貞のまま死んだ。でも、
また再び生きることができた。以前とは違う。今度は童貞のまま死
ぬのがどれだけ辛いかを知っているんだ、と。

今俺は五歳。前の人生は死んだのでチャラにするとして、魔法使
いになるまで残り二十五年。

そうだ。今度こそ俺はやり遂げてみせる。そのためなら如何なる努力も惜しまない。

俺は、今度こそ童貞を卒業してみせる！

1. いっちなんせゝになったら（ry

そして時は流れて。童貞卒業を誓ったあの日から早一年。思えば長い道のりだった。頑張って子どもっぽい振る舞いをしたり、近所の子どもたちと遊び呆けたり、いい学校に入るために勉強をしたり。いやー、大変だったぜ。わっはっは。

……正直に言います。大して苦労しませんでした。

学業面は言うまでも無い。余裕のよっちゃんだった。それに元々精神年齢が非常に低かったお陰で子どもの振りもガキ共とのコミュニケーションもうまくいった。なんか兄貴分的なポジションに収まっていたのにはびっくりした。案外悪い気はしなかったので、これからはそういう路線を進んでいきたいと思います。

そして、そんな俺ももう小学一年生！なんと私立だぜ、私立。私立聖祥大附属小学校…だったか。やったね、大学までエスカレーターだ！中学からは男女別という謎設計だけど構うもんか。

今思えば、俺は小学生のときどんな子だったんだっけ？六年という期間のほとんどを忘却しているなんて、なんか損した気分になるな。習ったこととかはほぼ覚えていてというのに。

いや、違うのかな？忘れていくけれど、改めて似たような問題を目にしたとき成熟した頭脳ではほぼノータイムで答えをだ導けるから思い出していると錯覚しているだけなのかな？

……ああ、眠い。体が小学一年生だからか、あまり夜更かしできない。布団に入ればすぐに眠くなってしまう。子どもの体というのも案外不便なものだぜ。……あれ？布団に入っただけで夢の国に旅立てるのは以前からだった…よう、な……zzz。

次の日。入学式は校長先生の話が長かったので眠ってしまった。

膨大な経験を積んだ俺には背筋を伸ばしたまま眠ることも動かなければいけないときに瞬時に目覚めることも容易だった。でもさすがに周りのやつらには気付かれてしまい注意されたが、それをきっかけに何人かと仲良くなることができた。結果オーライである。

そして現在。すでに入学式は終了し、初めてのホームルームでの自己紹介も終了。クラスのみんなが着慣れない制服と見慣れない面々の中にいるせいで不安がり教室中がざわざわとしている。

そんな中俺は、姓名の関係から必然的に決定された席に座り、頼杖をつきながらあくびをしている。眠いわけではない。ただ退屈なのだ。

「せんせー、おしっこー！」

前のほうの席に座っているイガグリ頭の少年が元気よく手を上げる。その姿にみんなは笑い、先生は苦笑いしながら少年の手を引いて教室を出て行った。

誰かがお決まりの先生をお母さんと間違えるってのをやってくれないもんだろうか。一度でいいから見てみたい。

「ねえねえ」

っと、前の席の女の子が話しかけてきた。そこら辺のマセガキなら女の子と話すのに緊張して口ごもったりするんだろうが、俺は違う。場数が違うのだよ！

「んー、なーに？」

豆知識。この頃の子どもはどうあがいても舌足らずになってしまいます。

それは小学校に入学してしばらく経ったある日のことであった。

『—————！』

「ん？なんだなんだ」

その日最後の授業を終えホームルームも完了。全員で元気よくさようならをした後、俺はしばらく友達と話し、さあもう帰ろうとかばんに手を伸ばした時、教室の隅っこでなにやら大きな声が聞こえてきた。

見ると、なにやら女の子二人がけんかを……いや、片方が片方のカチューシャを取り上げていじめているようだ。

いじめている方が、確かアリサ・バニングス。二三言しか話したことはないけど、普段の態度を見る限り成績は優秀。けれど友達を作るのが苦手なのか一人でいることが多い。

もう片方が月村すずか、だったか。こちらも成績は優秀。物静かな性格なのかお喋りする子はいるもののあまり深く接せずよく本を読んでいる。

うーむ。なぜこんな二人がけんかを……おっと、いかんいかん。

なにはともあれけんかを止めないと……と？

場を収めようと席を立った俺の目に映ったのは、何処からかつかつかと歩いてきた一人の女の子がけんかをしている二人に近づき、そしてアリサの頬をぶっ叩いた、っておい。

呆然と頬を押さえるアリサに向けて、その少女は、

「痛い？でも大事な物をとられちゃった人の心はもっともっと痛いんだみょっ！？」

スパーン、と小気味いい音を鳴らして頭を引っ叩いたらなんか斬新な語尾になった。

やれやれ、驚いた。この子は……高町なのは、だ。前述の二人よりは言葉を交わしたことがある。が、まさかこんなぶっ飛んだことを

するとは思わなかった。頬はだめだろ頬は。

頭を抑え涙目で睨むなのは。何か言いたげな表情だが、こちらとしても物申したいことがある。

「このバカちゃんが。確かに大切なものをとられたら辛いけど、それでもやっぱり叩かれたら痛いんだよ」

なのはの頬っぺたを掴みむにむにしながら言う。反論したそうだが変な顔になっているせいであまりしゃべれていない。にしても、よく伸びるほっぺだぜ。

限界まで引っ張った頬をぱっと放し「あうっ」身体の正面をなのはからアリサに変え、その勢いのまま今度はアリサの頭を叩く。なのはの時と比べて威力は四割減くらい。

「お前もだ。一方的に誰かを傷つけるなんて一番やっちゃいけないことなんだぞ」

「……あの、それなら一番ひどいのはキミなんじゃ……」

おずおずと。恐る恐るといった感じに発言するすずか。普通の人が聞けば至極真っ当だと思ひ息巻いて俺を糾弾してくるのだろうが、生憎ここにはまだそんな嫌な大人になっていない純粋な子どもかもしれないのだ。

加えて、用意周到な俺は効果的な言い訳もすでに準備してある。

「何を言っているんだ。確かに叩かれたら痛いけど、叩いた俺の心も痛いんだ！」

一部の隙もない完璧なロジックだった。なのはとアリサとすずか、それに周りで様子を見守っていた同級生たち全員がポカーンとしている。

とりあえず、当初の目的であるけんかの仲裁は完了したのでさっさと家に帰ることにする。今日は見たいアニメがあるんだ。カバンの取っ手を握りなおし、

「じゃあなお前ら。けんかなんか止めて仲良くしろよ」

言い残して、教室の出入り口をくぐる。

玄関に向かう道すがら、ウチのクラスの奴に手を引かれて廊下を走る先生とすれ違った。教師が投入されたのだから、これでこの件は完全に終了するだろう。よかったよかった。

翌日のことである。

「あ！やっと来たわね」

廊下で会う同級生と挨拶を交わしながら教室に入ると例の三人娘、なのは、アリサ、すずかが駆け寄ってきた。何か言おうとしたので押しとどめ、とりあえずは自分の席に向かう。

「なんだお前ら、揃いもそろって。そのようすだと仲直りはできたようだな」

「ええ。アンタが帰った後先生が来てね、それから怒られたりパパたちも呼ばれたりして大変だったんだから」

親御さんまでできたのかよ。それはきっとこの頃の子どもにはそこそこ堪えたのではないだろうか。

「で、結局何なんだよ。俺になんか用があるんじゃないのか」

「あ、それなんだけどね…」

「ちょっとアリサちゃん。ずるいよ、一人だけお話して」

「そうだよ。私たちだって関係あるんだからね」

一人だけぐいぐいと前に来ていたアリサだったが、両サイドの二人に言われ引き下がった。続いたのはすずかだ。

「えっとね、今日はキミに昨日のお礼をしたかったんだ」

柔らかな笑みを携えそう言っていると、残りの二人に目配せをして小さく「せーの」で

「「ありがとうございます」

「まあ…その、ありがと」

なのはとすずかはきれいに合ったのに、アリサだけは小さくもごもごとしていた。恥ずかしかったようだ。

さっそく二人が文句を言い出したので、気持ちは伝わったから十分だ、と治めといた。

わざわざお礼を言うためだけにとか律儀な子達だなー、と思い感心していると、なんと用件はまだ終わっていないかったのだ。

「あのね、その…わたしたちと、お友達になってほしいの」

「お、おう。いいけど」

もじもじしたなのはにお願いされてよく考えずに了承した俺。改めて真正面からそういわれると非常に照れくさい。OKした途端三人の表情が輝いたのを見てさらに照れた。羞恥プレイだろこれ。

「私は高町なのは！よろしくね」

「私は月村すずか。よろしくお願いします」

「アタシはアリサ・バニングスよ！よろしくしてあげるわ！」

やはりアリサだけ方向性が違った。アリサちゃんは素直じゃないなあ、と二人に言われ顔を真っ赤にしている。

と、ここまでしっかり自己紹介も踏まえて挨拶されたんだ。俺も応えないとな。

三人の顔を順番に見ながら、ニカッと笑って俺は言った。

「俺は八代健児―――よろしくな！」

2. 友達の家に行って外で遊ぶって本末転倒だよね

ここ私立聖祥大付属小学校は進学校である。

いやまだ小学校だって言うのは分かってるけど、それにしたって授業の進む速度が半端じゃない。以前は二年生で習ったはずの分野が当たり前のように一年生の序盤で出てくる。それについていく同級生も同級生だけど。伊達に小学校で入学試験とかやってないな。

試験により篩にかけられ、そしてその門を通ることができた者たちだけがここで学ぶことを許される。とはいえ、ここにいるのはやはり小学一年生。あまりに早すぎるその授業ペースによって混乱し、内容が分からなくなるやつもいる。

「それではこの問題を……高町さん、お願いします」

「……………はい」

——こんな風に。

指名されて立ち上がったものの、完全に硬直しているなのは。どうにかして答えを導き出そうとしているが、あの表情はさっぱり理解できないという顔だ。

今は数学——小学校でもう数学とか表記してやがる——の時間。

黒板に書かれている計算式は

『21-17』

である。

ある程度大きく、少なくとも年齢が二桁を超えた人からすれば非常に簡単な問題であろうが、僕たちはまだ7歳。くり下がりは難易度がやや高めである。

だがまあ、軽く見る限りではなのはの親友であるアリサとすずかは問題ないようだ。むしろ答えられないなのはを心配そうな目で見

ている。

席から立ち上がって数十秒。あー、だの、うー、だの唸りながらもいまだ答えは出ない。

おっと、なんか涙目になってないあの子？まあ当てられて答えられないのは結構なプレッシャーになるよね。そして助けを求めるようにーなぜ俺を見る。二人はどうした。

しかし、あんなウルウルした目で見られては仕方ない。俺はこっそりと、先生には見えないがなのはには見える角度でそっと指を四本立てた。

「ケンジくくん！さっきはありがとう！」

授業が終わって早々、なのはが俺の元に来て感謝を告げる。いやバカお前声を抑えろ。教材を片付けてる先生がこっち見てるぞ。先程のことが勘付かれたらどうするんだ。

にこにこと笑いながら混じりけのない純粋な目で見てくるなのは。何言っても無駄かと思いつつ、視界の端に同じようにこちらの席に向かってくるアリサとすずかの姿を見る。

「なのはちゃん、さっきは危なかったね」

「まったく、ちゃんと予習してないからあんな事になるのよ」

「にやはは、ごめんごめん」

口々に言い合いながら、三人は俺の周りの席に座り手にしたお弁当箱を机に下ろす。本来の席の持ち主はまた別の席で弁当を広げている。

今はお昼の時間。ぶっちゃけ学校生活で一番楽しみにしている時間といっても過言ではない。二位と三位は体育と図工がデッドヒートを繰り広げている。どっちも頑張れ。

そしてそして、悲しいことに。残念なことに。この学校は初等部からすでに弁当制なのだ。知ったときは愕然としたね。

嗚呼、愛しの学校給食。味付けはもっさりとしていたし、配分ミスって量がまちまちになったし、残ったパンやらデザートを取り合って野郎共とじゃんけん大会を繰り広げたりしたもんだ。懐かしきあの日々よ。

さようなら、人気のなかったコッペパン。さようなら、ひたすらになべの底に余ったうどん。さようなら、麺が千切れまくってたスパゲティ。さようなら、アルミホイルが剥がし難かった鯖の味噌煮。さようなら、行事ごとに用意されたスペシャルデザート。みんなみんな大好きだったよ。

「……ケンジくん？どうしたの？」

きょとんとしたすずかに呼びかけられて正気に戻る。いかんいかんちよっとトリップしてた。教科書やノートをしまい、代わりに弁当を机に広げた。

「うー、分かんなかったのがくやしいなー。今考えたらちゃんと分かるのに」

プチトマトを食べながらなのはが言う。口に物入れて食べるのはよしなさい。

「ああいうのはそのまま解こうとするんじゃないくて、出来るだけ簡単にしてから解くんだよ」

「どうやって？」

「例えば……そうだな、両方の数字から10引くんだよ。そうすれば『11-7』で、最初よりは簡単だろ？」

『おおー』

感嘆の声が漏れたところで、他にも色々方法があるから自分で考えてみな、と言っておく。

偉そうに教師ぶってはみたものの、実質中身はコイツらより歳上なので優越感なんかよりなんか虚しさの方が勝った。

弁当の中身が日の丸弁当だったのも、もしかしたらそれに拍車をかけているのかもしれない。

ちなみに、なのはは小さめのおにぎり。アリサはサンドイッチ。すずかは五目チャーハンだろうか。なんなんだこの格差は。

本日最後の授業が終わり、あとはもうさっさと帰ってしまおうとした矢先、

「ケンジくん！」

なのはを筆頭とした三人娘がパタパタとやって来る。

机に身を乗り出して、

「これからなのはの家で遊ぶんだけど、ケンジくんも一緒に遊ばない？」

「いいよ」

女の子からのお誘いは出来るだけ断らないようにしているんだ。なんちゃって。

バカなことを考えながら了承を貰えたことに嬉しそうにはしゃぐなのはを、そして一緒に遊べると分かって喜んでいるアリサとすずかを眺める。まあアリサはなんてことなさそうにしているが楽しみなのが隠しきれていない。素直じゃないなあアリサちゃんは。聞けばこの間のいざこざももとはすずかと仲良くしたかったからだとか。不器用にも程がある。

そろそろと連れ立って教室を出る。すれ違う顔見知りには挨拶を交わしながら俺たちは校舎を出た。

「ただいまー！」

「「「おじゃましまーす」」」

校門を出てから十数分、なのはの家の玄関を潜った。聖祥は行きはバスで送ってくれるのに帰りは歩きという不親切なことになっている。

なのはとアリサとすずかは同じ方向のバスらしく朝は一緒に来ているらしい。俺ん家は反対方向にあるのでここまで来たら帰るまでの距離は延びることになるのだが、まあ子どもの付き合いというのはそういうものなのだろう。

というか、この家すごいね。家自体は普通の一軒家なのに敷地が広い。家の裏に道場らしき建築物が見えた。高町家ばねえ。

「この時間はお父さんもお母さんもお店なんだ。もう少ししたらお兄ちゃんかお姉ちゃんが帰ってくると思うから」

「うん？なのはのお父さんとお母さんはどこかのお店で働いているの？」

「アンタ知らないの？なのはの家は『翠屋』っていうケーキ屋さんを営んでるのよ」

マジでか。

その名前には聞き覚えがある。というか何回かそのケーキ食ったことあるわ。去年の誕生日に食べて感動した記憶がある。

そっか。なのはの家がやってる店だったのか。ううむ、なんという偶然。人の出会いとは摩訶不思議なり。

「さ、入って入って」

なのはの先導に従って廊下を進み、リビングに入る。

なのはがトテトテとキッチンへ行きお茶を用意しようとしたので

手伝う。人数分の麦茶をコップに注いでテーブルに運んだ。

「それで、なにして遊ぶ？」

全員が一口ずつお茶を飲んだところでアリサが切り出した。って、考えてなかったのかよ。

いや。もしかしたら男の俺がいるからこうなったのかもしれない。女の子だけならやることもすぐに決まったのかもしれない。

「私はなんでもいいよ」

「なのほもー」

「そう……じゃあケンジは何かしたいことある？」

俺に振るのか。

さてどうする。遊びの内容なんかで悩むことになった原因が俺にないとも言えないのだ。ならばここは自らナイスアイデアを提供するのが筋と言うものだろう。

しかし、何にしよう。これが男だけなら適当に外に出て遊ぼうと言いつけるのだが、ここにいるのは女の子である。アリサはともかくとして、すずかは運動はできるが基本におとなしい子だし、なのはにいたっては運動神経が切れているといってもいい有り様である。あまり激しい動きをするのは好ましくないだろう。

ならば、だ。

「かくれんぼ、とかどうだ？」

言っておいてからなんだが、コレは外したと思った。家で遊ぶって言うてんのかくれんぼはないだろう。

と思ってたら、

「悪くないわね。なのは、大丈夫？」

「うーん、お父さんとかの部屋に勝手に入らなければ平気だと思う」

「それじゃ、決まりだね」

意外に好感触。トントントン拍子に決まってしまった。まあキミらが

いいならいいけどさ。そしてレッツじゃんけん。グー、グー、グー、
チョキで一発で決まった。

「うっ…私が鬼かぁ」

悔しそうにすずかは自らのチョキを見る。可哀想だけど、これも
社会の厳しさというもののだよ。

鬼が決まったところで、なのはから入ってはいけない場所をいく
つか聞いて、ようやくゲームスタート。顔を隠して数を数え始める
すずかを尻目に、俺達は駆け出した。

バタバタと足音を響かせながら一目散に二階への階段をかけ上がる
のはと、それに追従するアリサ。この家のことをよく知っている
のはが一目散に二階に向かい、そのことを把握し利用しようと
アリサも着いていったのだろう。

ふっ、だが、まだまだ甘い。そんなにドタバタ足音をならしては
すずかに居場所を教えているようなものではないか。所詮は子ども
のう。

対して、見た目は子ども、中身は大人、そして性格は大人気ない
俺は、あの二人を囷に使い、別の方向に逃げたいと思います。

足音を殺し、抜き足差し足でスニーキングしていると、廊下の突
き当たりにあるドアを発見した。恐らくは勝手口、裏口と呼ばれる
類のものだろう。開けてみる。

開けた視界には飛び石の道と先ほど見えた道場の出入り口。やっ
ぱスゲーデカい。学校の道場なんか比べ物にならないほどしっかり
している。扉は空いているようなのでちょっと中を覗いてみるこ
とに。

「ん？誰だい、君は」

ヤベエ、人に見つかった。スニーキング失敗。

というか、お前こそ誰だ。道場の真ん中で結跏趺座していたが、

精神統一でもしていたのだろうか。

あ、ひょっとして、

「なのは…ちゃんの、お兄さん？」

「ああ、なのはのお友達か。俺は高町恭也。なのはの兄だ。よろしく」

ご家族の前だと呼び捨てにするのに抵抗があるのは俺だけだろうか。

いやー、それにしても恭也さんイケメンだなー。高校生ぐらいかな？それにしては雰囲気が大分落ち着いている。俺がこれぐらいの頃にはもっとバカやってたはずだけだな。

おおっと、出来るならもう少し歓談などをして親交を深めたいのだが、今はそんな場合ではないのだった。

「あの、どこか隠れられる場所はないですか？」

「隠れる？ああ、遊んでいるのか。それなら…彼処なんかどうだ？」

微笑ましいものを見るような目をした恭也さんが示したのは壁。

より正確には壁に取り付けられた引き戸。ガラガラと恭也さんが開けると、中には箒やぞうきん、バケツなどといった掃除道具が収納されていた。

「ここなら見つかることはないだろう。俺はしばらく練習をしているから用があったら出てくるといい」

素晴らしい。パーフェクトじゃないか。会って間もない子どもにここまで親切になってくれるなんて…きっと学校ではモテモテに違いない。クソ羨ましいぜ。

まあ、そんなことはどうでもいい。さっさと隠れてしまおう。

クックック。アイツらが戸惑う様が目に浮かぶ様だぜ。

……と思っていた時期が僕にもありました。

「ケンジくん、みーっけ」

暗く狭い空間に独りだった俺を照らした暖かな光。見ればそこには、和かな光を背に受け笑みを浮かべる――

「げえっ、すずか」

「いくらなんでもその反応はひどいよお」

優しい微笑みが苦笑いに変わる。どっちにしても可愛いけどね。

「ちえー、見つかったかー。俺で最後か？」

「うん。なのはちゃんもアリサちゃんもとっくに見つけたよ。ケンジくんだけだよ、こんな難しいところに隠れてるの」

二人の評価が辛口っすね。後ろの方で誰かが『言ってくれるじゃない』とか『うう、ひどいよー』とか言ってるのが聞こえてるはずなのに表情に微塵も変化がない。おとなしい子だとは思っていたがどうやらそれだけじゃなさそうだ。……月村すずか、おそろしい子ッ。

のそのそと這い出ながら、

「しかし、よく分かったよな、俺の隠れ場所。結構自信あったんだぜ」

と言うと、目の前の少女は楽しげに笑い、

「協力者がいたんだよ」

愛らしく、ピッと人差し指を立てた。

つられるように指される方向に首を動かす。

そこには申し訳なさそうに笑うイケメンの姿があった。

「犯人はあなたですか……」

「いやー、すまない。なのはに頼まれてしまって、つい」

ダメだこのお兄ちゃん妹に甘すぎる。

「というかなのはもなのはだ。捕まった人は協力したらダメだろう」

っ」

「だって、ケンジくんいくら呼んでも出てきてくれないんだもん」
え。呼んでたっけ？

「何回も呼んだよ。もうやめにしよー、って」

「家のあちこちを探しても見つからないから、もしかしたらここか
もってなのはが言ったの」

「五分前くらいからキミを探していたぞ。声はここまで届いていた」
次々と集まる有力な証言。しかし俺には見に覚えがない。そして
真実は一つ。

謎は、全て解けた！

「ごめん。この中で寝てた」

アハハと笑う俺。あきれた様子の三人。

そんな光景を見て、恭也さんはうっすらと微笑んだ。

「はじめまして。八代健児です。なのはちゃんのともだちやってま
す」

ぺこりと頭を下げる。

「これはご丁寧に。私は高町士郎。なのはの父親だ」

「私は高町桃子。なのはのお母さんよ。」

「お姉ちゃんの美由紀だよ」

三人がそれぞれ言う。そんないっぺんに言われたら覚えきれない
よ。

かくれんぼが終わってしばらくして。道場で鍛練を続けると言う
恭也さんを残し、母屋に帰ってきた俺たちは残りの高町家構成員、
父、母、姉にエンカウトした。

で、先ほどのような口上と相成ったわけである。アリサとすずかは何度かなのはの家には来ているそうなので初顔合わせになるのは俺だけなのさ。

「キミが健児くんか。キミのことはよくなのはが話しているよ」
士郎さんが言う。いったいどんなことを話したのか気になってなのはの方を見ると、何故か嬉しそうに笑っていた。

というか、士郎さんも桃子さんもお若いですね。お世辞抜きで美由紀さんと同年代くらいに見えるよ。いや美由紀さんが老けているということではなく。

本当ならもっと話したいのだが、高町夫妻はすぐ翠屋に戻らなくてはならないらしい。ここへは備品の補充に來ただけだそうだ。後日、店の方へ伺うことを約束し二人を見送った。
で。

「それじゃー、何をして遊ぼっか」

どういうわけか妙にやる気に満ちた美由紀さんだったのだが、ふっと表れた恭也さんに「お前も鍛練があるだろ」と首根っこ掴まれて連行されていった。「ひーん」という悲鳴が廊下の奥から聞こえてくる。

「お姉ちゃんのバカあ……」

恥ずかしそうに俯くのはであった。

その後、変える時間になるまで三人でトランプをして過ごした。イカサマしてたら怪しんだアリサに看破されてしまい、しこたま怒られた。小一相手ならばれないだろうと油断したのがまちがいだった。今回のことはいいい教訓になるだろう。

今世で初めて女の子の家に遊びに來た日。色々驚いたことがあったが、一番驚いたのはアリサとすずかのお迎えが黒塗りの外車だったことだろう。

お嬢様だったんですね……。

世の中にはまだまだ俺の知らないことが一杯あるんだなあとしみじみ考えながら、夕焼けに朱く染まった帰り道を歩いた。

3. 大人同士の話って子どもには退屈なんだよ！

「へえ、そのなのはちゃんって子は、あの翠屋さんのところの娘さんだったのか」

枝豆をモサモサ頬張りながら俺が言った事にやや驚いたような反応をする男性。

「あそこのケーキ美味しいのよね。毎年ケンジのバースデーケーキはあそこのだけど、今までいきなり仕事が入ったりで直接行ったことは無いのよね」

その男性に追加のおつまみを手渡し、美味しいといわれて嬉しそうにする女性。

言うまでも無く、俺の両親である。

俺の両親は一般人だ。

こんな言い方だとまるで俺が異常者のように聞こえてしまうが、そこは勘弁してほしい。ほら、転生（？）とかしたんだから十分異常だろ。

ともあれ。

両親の勤め先が、父親自ら立ち上げた小さな輸送会社であるという点を除けば、大方普通の人であろう。少なくとも俺はそう解釈している。……なんかフラグっぽいな。

なんでも運送にはまだ若いころ諸国を旅して回った時の現地でのコネを使っているらしい。やりかたが悪どかった。

前世では父親は会社員、母親は専業主婦だったので、違うと言えば違うのだが、しかしそのこと以外は名前も外見も誕生日も変わらない。馴染み深い両親だった。

運送業といっても実際に船に乗ったりなんたりしているんな国へ

物資を運ぶのは百名程度の従業員で、社長である父とその秘書という立場の母は基本国から出ない。事務仕事やら何やらを小さな事務所でこなしている。

時折、新たな顧客との商談のために父が外国へ行くこともあるが、それも一週間以上かかることはない。母親は必ず家にいてくれたし、ちょっとした出張と思えばやはり以前と変わらない。

以前の両親は年を経てもまだ若々しい外見を保っていたので、やっぱり違和感が無い。あるとすれば身長差か。以前は視線は同じくらいだったのに、今は見上げないと届かない。いつか絶対越してやる。

「そうだな。子ども同士が友達になったというのなものにかの縁だ。今度お店のほうに顔を出してみようか」

「そうね。丁度次の休日は仕事もないし、行ってみましょうか」
とんとん拍子に話がまとまっていく。俺はそれに口を出すでもなく、えだまめをつまみながら両親を見ていた。

俺の親はいい親である。前世と同じ、あるいはそれ以上に。そう感じるのは俺が年月を重ねているからかもしれない。大きくなって初めて親の有難みが分かるとよく言う。俺には主だった反抗期はなかったと自分では思っているが、どうだったのだろう。両親に迷惑をかけたのであろうか。

……そういえば、俺は親より先に死んだんだよな。これが一番の親不孝だったのだろう。もうそんなことはしない。絶対に、だ。
少し感傷的になってしまった。失敗失敗。

「ということだ、ケンジ。今度翠屋に行くことになったんだが、構わないか？」

直前までの暗い気持ちを吹き飛ばすように顔をぶんぶん振り、俺は父親の問いかけに元気よく頷いた。

そして、後日。我が八代一家は翠屋の前に集結していた。

別に気負う必要は無い。軽く挨拶に行くだけだ。特別おめかしもしていない。自然体自然体。

尚、本日俺が翠屋を訪れることはなのを含めた三人娘には話していない。それよりも先に今日ここにすずかとアリサがくるという情報を仕入れたので敢えて控えたのだ。有り体に言えば、ちょっとしたサプライズである。

親父が先んじてドアのノブを掴む。カランコロン、という気持ちのいい響きのドアベルが鳴ると、入り口まで士郎さんが出迎えてくれた。

「いらしゃいませ。喫茶翠屋にようこーーっ！」

笑顔で迎えてくれたはずの士郎さんだったが、突然顔を険しくして少し下がった。急にどうした？

「……………」

「…下がってなさい」

さらに。こちら側は父親が俺たちを背に隠すようにして一步前に出、母は俺の前に手を出し前に行かないようにする。

三人とも目が鋭い。空気がピリピリしている。シリアスに突入するのは勝手だけど俺を巻き込まないでほしい。

どーしたもんか。この場の雰囲気を変えられるような手段はないか、と考えだした時だった。

「あー！ケンジくんだ！」

パタパタと店の中からののが駆け寄ってきた。よう、と軽い感じで父親より前に出る。焦ったような表情で、今にも「なのは、危ない！」とか言い出しそうな剣幕だった士郎さんは、しかし俺を見

た瞬間硬直した。なのははそんな父親の奇行が目に入らないのか、ニコニコと俺を見て笑っていた。

「どうしたのケンジくん、お店に来るなんて。昨日さそったら用事があるっていったのに」

「ああ、アレは嘘だ」

「ええっ!？」

そうなのだ。

なのはとアリサとすずかがこの店にそろう、という情報を俺に流したのは他でもない、なのは当人なのだ。

まあその場では適当に歯医者に行くとか言って誤魔化したんだが。「実はここにくるのはおとといから決めてたんだ。だから昨日の話はでっちあげだ」

「ひどい！なんでそんなことするの!？」

「キミの驚く表情が見たかったからだよ。お嬢さん」

「にゃー!」

嘘を吐かれたことにか、それともそれをまったく悪びれもしない様子にか。いずれにしてもなのはは奇声を上げて激昂し、俺に殴りかかってきた。子どもにありがちな腕を回すだけのぐるぐるパンチで。

それをすべて回避する。運動オンチのなのはの拳なら容易い。当たっても痛くないだろうが、しかし、おちよくれるまで人をおちよくるのが俺の流儀だ。

騒ぎを聞きつけてやってきたアリサとすずかが俺の姿を見てやはり驚いた。そして真相を（というか嘘を）話すとやはり怒った。アリサなんかは同じように殴ってきた。へっぴこなのはと違いアリサの運動センスは小学生にしては中々だが、しかし所詮は子ども。俺の敵ではない。

反復横とびですべて避けきってくれたわ。フハハハ。

ぎゃーぎゃーと騒ぎながら俺たちは店内へ歩を進める。そっと後ろを確認したところ、両親と土郎さんは二言三言言葉を交わすと、言葉少なく連れ立って歩きだした。

「どうも、八代雄飛です。はじめまして」

「妻の優衣です」

「息子の健児です。初対面の人ははじめまして。そうでない人はこんにちは」

これが八代家の戦闘前口上である。嘘である。

正直な今の心境としては、なんだかめんどくさい事になったなあ、という感じである。

なんと、喫茶翠屋の店内には経営者の高町一家の他に、アリサの父親のデビット・バニングス氏と執事兼運転手の鮫島さん。加えて、すずかの姉の月村忍さんと月村家に仕えているメイドのノエルさんとファリンさんの姉妹がいたのだ。

道理で店の前に黒塗りの車が二台も停まっている訳である。気付けよ俺。

周囲に説明を求め、子どもならではのどこか要領の得ない話をまとめると、以前の学校に親が呼び出された際に土郎さんとデビットさんが親しくなり、普段仕事で忙しいデビットさんがたまたま空いた休日に娘が翠屋に行くというのでそれに便乗し、さらには妹同士が友人になったことがきっかけでこれまで同じ高校に通っていたがあまり接点がなかった恭也さんと忍さんが親しくなり、やはりたまの休日に妹が出かけようとしているのでそれに引っ付いてきて、意図せずして見事に三人の家族がそろい、丁度いいから子どもたちの

情報交換をしつつ親睦を深めよう、という話になった矢先に俺たち一家が訪れたらしい。

うん。どこをどんなふうにしたらこんな偶然が起きるんだ。びっくりだよ。というか恭也さんと美由希さんも父さんと母さんを見た瞬間身構えたのはなんで？早々に子どもしかいないゾーンに逃げた俺にはそれ以上父兄さんたちの話を聞くことはできないけど、なんとかうまくやってほしい。

「大丈夫かな？父さんたち、ちゃんと仲良くできると思う？」

思わず正面のなのはに問いかけてしまう。

「……………」

しかし、当のなのはちゃんは話しかけた途端ぶいっとそっぽを向き、一言もしゃべってくれなかった。

思いがけないことにやや面食らい、同時になんとなくいやな予感を覚えながらも今度は斜向かいのアリサに目をやる。

こっちははなから俺と顔を合わせる気が無いらしく、頼杖をついて窓の外をながめていた。

最後の砦となった隣のすずかはというと、二人とは違い俺から顔を背けることは無く、むしろ「なに？」という風に首を傾げていた。いつもとおなじようにニコニコと朗らかな笑みを携えて。

一瞬安心しかけたが、すぐに思い直した。表情が微塵も動かない。ぴくりともしない。その笑顔の下にどんな感情が有るのか俺には分かるわけが無かった。

怯み掛けたが気を取り直し、一番態度がかわいらしかったなのはに話しかけることにした。話しかけても答えてもらえず目も合わせてもらえなかったが、俺はあきらめなかった。

「…なあ、なんで何も言ってくれないんだ？」

「ふーんだ、うそつきのケンジくんと話すことなんて、なんにも無

いもん」

ものすごく根に持っていたようです。恐らく二人も同じ意見なのだろう。

やっぱり嘘をついたのを謝らなかったのがダメだったのだろうか。そりゃ明らかに悪いのはこっちなのにあれだけ飄々としてたら腹も立つだろう。少なくとも俺ならぶん殴っている。

ああ、些細な嘘から人間関係が壊れていくというのは本当だったのか。

……ふん、いいだろう。そっちがその気なら俺にも考えというものがある。こういう時のために以前から常々考えていた一発逆転の打開策。受けてみるっ！

「ごめんなさいでしたっ！」

はきはきとした謝罪とともに頭をテーブルにたたきつける。一回では効果が見られないようだったので、繰り返す。

五回目ですずかが「しょうがないなあ。これからはしちゃダメだよ」と可愛らしく許してくれた。

十回目あたりでちらちらとこちらを伺っていたなのは俺の額が赤くなっていることに気付き「わあ、もういいよ！許す許す！」と慌てた感じで言った。

二十回目ぐらいの時、なのはとすずかから宥められ、俺の度重なる謝罪も少しは効いたのか「…次は無いからね」とようやくアリサは俺の顔を見てくれた。

全員からお許しを貰った俺はふう、と息を吐いた。なんとか元の関係に戻れたようである。

子ども組がなんだかんだやっている内に保護者たちはずいぶんと

仲良くなったらしく、向こうからは笑い声がひっきりなしに聞こえてくる。

「どんなことを話してるのかな？」

クリームソーダを飲む手を休め、なのはがぽつりとつぶやいた。

「きっと大人同士のむずかしい話をしてるのよ」

「わたしたちにはまだ早いんじゃないかな」

紅茶を優雅に飲みながらアリサとすずか。と言っても砂糖たっぷりだけ。

「それじゃあ、こっそり聞きに言ってみるか？」

ズルズルとストローを吸い、オレンジジュースを完全に空にしてから俺は言った。そろそろ黙って座ってるのにも飽きてきたのだ。

急な提案で三人は一瞬戸惑ったが、しかしそこは好奇心旺盛な幼少期。隠しきれないワクワク感を滲ませながらうなずいた。

唇に人差し指を押し当て静かにするようジェスチャー。そしてテーブルの下にもぐるようにハンドサインで伝える。まあ結局伝わりはしなかったけれど、俺が率先して潜り込むと意図を察して続いてくれた。

全員が隠れたことを確認し、再度『しー』とする。三人も同じように『しー』とした。うん、可愛い。

こそこそと、四つん這いで行動を開始する。できるだけ音を立てずに。全体的に鈍いなのはがテーブルに頭をごとくぶつけたがアリサとすずかと『しー』とやるだけ。涙目のなのははこくこくと頷いた。

大人たちの輪まで約三メートル。気付かれないよう少しずつ少しずつ進んでいたせいで時間がかかったが、ようやく話している内容が鮮明に聞こえる距離まで来た。

どれどれ…？

『いやあ。ケンジくんはもう夜中に一人でトイレに行けるんですか。しっかりしてますね。ウチのなのは全然ダメで、いつも私か桃子を起こして行くんですよ』

『ウチのすずかは恥ずかしいのか、姉の私でなくファリンかノエルについて行って貰うんですよ。しかも私には言わないように口止めまでして』

『ウチのアリサなんかはどうも意地っ張りでしてね。暗いところが怖いのに誰かに付き添ってもらうなんてみっともないからとトイレを我慢して、結局おねしょをしてしまうんですよ』

「「「きゃあああああああああああああああああああああああああああああ！？」」」

なんとまあベストタイミングでいい話題をしているんだ。

赤面して悲鳴を上げた彼女たちはそれぞれの保護者の下へ走って行って文句を言っている。そして生暖かい笑みを浮かべた大人がそれを軽く受け流す。子どもは親には勝てないのさ。

今の話の流れから察するに、子どもの普段の生活について情報を交換していたらしい。俺は普段からそれなりにしっかりしていたから面白おかしく話題にされることは無かっただろう。ネタにされなくて本当によかった。

『……………』

「—————」

重々しい沈黙がこの卓上に展開している。

思わぬところから自らの恥部が曝け出された少女たちはすっかり

意気消沈している。なのはわざわざ靴を脱いでまでソファの上でひざを抱え顔を埋め、すずかは両手で顔を覆い、アリサはテーブルに突っ伏している。

仕方の無いことなのかな、と思いつつおかわりしたジュースを啜る。

「…違うのよ」

と、ここで。恐らくは一番ダメージが大きかったであろうアリサが呟いた。

「別に暗いのが怖いんじゃないで、あの日はたまたま寝る前に心霊番組を見ちゃって、ふだんなら気にならないカーテンの隙間とかクローゼットがやけに気になって、ベッドから出るに出れなくて……」

なにやら必死で弁解しようとしているのだが、しかし何一つ事態はいい方向へ向かってはいない。むしろ墓穴を量産している。もういい。もういいだろッ！

「……まあ、なんていうか」

アリサの独白のお陰でさらに空気が重くなった気がして、それをなんとか払拭しようと頑張った結果、

「寝る前には…ちゃんとトイレに行こうな」

こんなことしか言えなかった。

直後に、赤面したアリサ、同じように赤面したなのはとすずか、三人から同時に糾弾されてしまった。その反応から察するに、おそらく二人もやってしまったことがあるのだろう。

この場合、悪いのは気の聞いた発言ができなかった俺なのか、余計な火種をまいた大人たちなのか、はたまた年齢に不釣り合いな羞恥心を持ち合わせていた彼女らなのかは…俺にはさっぱりだった。

だってまだ俺（戸籍上は）7歳なんだから。

4・歩くのはそんなに好きじゃない

抜けるような青空。ぽつぽつと浮かぶ積雲。五月晴れの気持ちのいいこの日、私立聖祥大附属小学校一年生はぞろぞろと行列を作って行軍していた。

そう、遠足である。

目的地は小さな山の上に作られたキャンプ施設。夏にでもなれば多くの家族がテントを張ってにぎわうことになるのだが、今はまだそんな季節ではない。

いつもより早めに登校しグラウンドに集合。規定のスクールバッグでなく各自で用意したリュックサックを背負い、バスに乗り込んで出発したのが約二時間前。

一学年全員を乗せた数台のバスはそのまま県境を越え、目的地のすこし前で停車した。そこでバスから降りるように指示される。ここから先は歩けということである。

生徒たちは事前に数人のグループを作り、その中で決められた班長にはこちらの地図が配布されている。小学生にも分かりやすいように易しい文章で説明が入れられているし、道中には数人の先生が見張りに立っているので安全は保障されているのだと言う。

一番にキャンプ場に着こうとするグループ。他のところと合体してより大きくなるグループ。バラバラになりそうなのを必死で班長が押しとどめているグループ。いろんな光景が展開されていた。

「ケンジくん、私たちもいこうよ」

わいわいと騒ぎながら進んでいく子どもたちを優しい目で見つめていた俺は、後ろからかけられる声に振り返った。そこには同じグループのメンバーである件の三人娘がいた。

実はグループ決めの際、俺をどこに入れるのかでクラス内で論争になったのだ。別に俺が最後まであぶれて押し付けられるとかではなく、むしろ誘いが多すぎて困っちゃうくらいだったのである。いやー、モテモテで参っちゃうなー。なんつって。

最終的に見るに見かねた担任の先生が提案したあみだくじにおいて、見事俺の所有権を勝ちとったのはわれらがアリサお嬢様だったという訳だ。

おう、と軽い調子で答えながら背負ったリュックを背負いなおす。中身は弁当と水筒とタオルと何かあった時のための着替えである。三百円までのお菓子はバスの中で食べちゃったぜ。

「まったく、勝手にフラフラしないでよ。この班の班長はアタシなんだから、ちゃんと指示に従いなさいよね」

地図を見ながら顔をしかめていたアリサが文句を言ってくる。見方が分からなくてイライラしているのだろうか？そんなの見なくてもも前方に同じ場所へ向かうやつらがぞろぞろいると思うのだが。

「それにしても、いい天気でよかったねー！」

にぱにぱと快活に笑いながら、何が楽しいのかその場で突然くるくる回りだすのは。前日てるてる坊主をお願いする、と息巻いていたから嬉しさも一押しなのだろう。

「もう、みんな。おしゃべりも良いけど、とりあえず行こ？ここのままじゃ私たちいちばん最後になっちゃうよ」

アリサの隣で困ったような表情をしていたすずかの発言に、ぎょっとして周囲を見回す。マジで誰もいなかった。先行している彼らの背中もいつの間にか小さくなっている。

「やべ、急ぐぞ！」

バカの一つ覚えみたいに回り続けていたなのはの手を掴み、唸りながら尚も地図とにらめっこをしていたアリサから地図を奪い一瞬

だけ確認して大まかな内容を把握。折りたたんでアリサのワンちゃん柄のリュックにねじ込んで手を掴む。すずかに一声かけてから、二人を引っ張って歩き出した。

別に順位を競っているわけではないが、俺の中の男の子が最下位になることを拒んでいるのだよ。

今日登る山は別に勾配が急なわけでも標高が高いわけでもない。

傾斜は緩やかであり、登るにつれて普段は見ることでできない高所からの町並みを思い切り楽しむことができる、比較的楽なコースだ。楽なコース……のはずだったんだけど。

「ひい……ひい……ふう……」

脇道に特攻して入手した長めの木の枝を杖代わりに、ひいこらひいこら足を引き摺って進む少女が一人。

なのはちゃんであった。

まさか：運動オンチなのは知っていたけれど、ここまで体力が無いとは思わなかった。家が道場なのになんだこの貧弱な子は。

「おーい。置いてくぞー」

「ま、待っ……てえ……」

息も絶え絶えな様相で、よろよろと手を伸ばすなのは。オラ、足が止まってんぞ。

「…ねえ、ケンジくん。ちょっと休憩しようよ。休ませてあげないとなのはちゃんたおれちゃうよ」

はらはらと心配そうにゾンビ状態の親友を眺めていたすずかが提案する。ちなみにリーダーの方かというと、腕組みをしていかにも待ってますよ的な雰囲気を出しているが、しかしさっきからチラチラと労わる様な目でゾンビを見ている。素直じゃないなあ。

別に俺は休憩しても構わないの無いのだが、一方でそれを渋る面もある。

俺たちのグループはすでに最下位。おまけに前のグループとは大きく差が開いている。まあそれはいいのだ。問題は、目的地であるキャンプ場に到着していなければいけない制限時間が設定されているのだ。

今ここで少し休憩しても、歩き出せばまたすぐなのはバテるだろう。そしてまた休憩。またゾンビ化。そうこうしているうちに時間は過ぎてしまうのだ。時間内にたどり着けなかったグループには特別課題が出されると事前に通告されている。面倒くさいので勘弁願いたい。

以上の理由から俺は休憩をとるか否かを迷っているのだ。決してヘロヘロなのはが可愛いとか思ったりしていないぞ。

「なのは、辛い時はな、楽しいことを考えるんだ」

適当にそんなことを言ってみる。おしゃべりで気を紛らわせて疲労を忘れさせる作戦だ。

「…たの、しい、こと？」

「そうだ。ほら、『ここからの景色きれいだな』とか『お弁当の中身はなんだろうな』とかさ」

「おべんとう……あ、そうだ。お母さんが『みんなで食べなさい』って言ってシュークリーム用意してくれたんだ。お昼ごはんのときに食べよ？」

「まじか。やったね」

美味しさには定評のある翠屋のスイーツだ。これは期待できるぞ。

「お昼ごはん……キャンプ場……お山のとっぺん……まだまだ遠い………うう」

しまった！ちょっと目を離した隙になのはが意気消沈している。
くっ…作戦失敗か。

「は…あ、はっ、はあ…」

息切れしすぎ。体力が無いにもほどがあるだろう。

…まったく、仕方ないな。

やれやれと思いつつ、なのはに歩み寄る。リョックをいったん背中から降ろし、体の前に持つてくる。状況が飲み込めていないのはの前で背中を向けて屈みこむ。

「ほれ、乗れ」

「え…いい、いいよ。ケンジくんに、迷惑が…」

「今のままでも十分に迷惑だ。時間がもったいないからさっさと乗れ」

「うう、ごめんなさい。それと、ありがと」

申し訳なさそうにおずおずと、なのはは覆いかぶさってくる。その体は疲労からか熱を持っている。春のさわやかな風が熱を冷ましていくのが分かった。

「やさしいね、ケンジくん」

「カッコつけちゃって。疲れても知らないわよ」

「なめんな。こんなチビ一人背負ったところで大して変わらん」

「ち、ちびい！？ケンジくんひどい！」

なんだよお前元気じゃねえか。なら降ろすぞ。

しかし負担がないと言うのは本当だ。例えば体は小さくとも女の子一人くらいは軽いものだ。あとは徐々に積み重なっていく疲労を面に出さない我慢強さだな。

居心地悪そうに体を動かすなのはを無視しながら、今までよりも重い足を動かした。

そして目的地に到着した。規定時間の十分前に。当然だが一番最後だったが、しかしそれを残念に思う気持ちよりも達成感のほうが上回ってしまった。

結局俺は終始なのはを背負っていた。遠目にキャンプ場が見え始めたあたりで降りたいというから降ろしたが、誤差の範囲だろう。さすがのなのもラスト二百メートル前後の途中でへばったりはしなかった。

現在十一時後五十分。集合時間は十二時で、つまりはお弁当の間である。

先に到着していた同級生たちは広い草原を走り回るか、シートを広げて今か今かと弁当を楽しみにしているかのどちらかだ。俺たちは後者のグループに入ることにする。

弁当の中身はなんだろう、と三人と話しているとすぐに十二時になった。先生方が総出で散らばった生徒をかき集めている。全員いるか点呼をした後、拡声器を使った学年主任の挨拶に合わせ、

『いただきます！』

ようやくご飯である。はらへったー。

ランチボックスをオープン。おにぎり、タコさんウィンナー、鳥のから揚げ、玉子焼き。うむうむ。やはりこういうときのお弁当はがつつりしたものがいいよね。

おにぎり（鮭）を頬張りながらお嬢様方のお弁当をしてみる。

なのははいなり寿司がメイン。アリサとすずかはサンドウィッチ系統のものだった。俺とは違いサイドメニューは野菜などが主である。

ふむ。どれも彩り豊かで美味しそうである。……あ、いや、決して俺の弁当に文句があるわけじゃないんですよ。ウチの弁当いつも

美味しいし。母さんありがとう、愛してるよ。

「みんなで食べなさい、ってお母さんが多めに作っちゃったんだ。よかったらたべてね」

なのはが弁当のふたの上においなりさんを何個か移動する。おお。これはありがたい。

せっせとおにぎり（昆布）を飲み込み、一息つく暇も無くお稲荷さんに手を伸ばす。

「もう。ケンジくん、そんなに慌てなくてもごはんは逃げないよ」
「まったく、はしたないわね」

何とでも言え。以前から常々なのはの弁当をつまんでいる俺は桃子さんのつくる和食のうまさを知っているのだ。お嬢様方には分かるまい。食わないと損だぜ。

子ども用にやや通常より小さめに包まれているいなり寿司を半分までパクリ。うん、うーまーいーぞー。

一口目を即座に飲み込み、残りも咀嚼。最速で十分に味わった後、二つ目に手を伸ばした。

「あ、コラ。あんたばかり食べてどうすんのよ。それに、まだ自分のお弁当のこってるでしょ。それ食べてからにしろなさい」

まさに正論。ぐうの音も出ない。ぎゃふん、くらいなら言える。

おにぎり（塩）をパクリ。パクリ。ウィンナーパクリ。パクリ。から揚げパクリ。パクリ。玉子焼きは自分ルールでラストなんです。「これなら文句無いだろう」

「はやっ。そんなにおなかへってたの？……んー、よかったら食べる？」

餓鬼の如き勢いで弁当のスペースを空けた俺を見て、アリサはサンドウィッチを一切れ差し出してきた。

「マジで？いいの？」

「ウソついてどうするのよ。もともとちょっと多いかな、って思ってたし。で、食べる？」

「もらうもらう。嬉しいなー」

「あ、ケンジくん。じゃあ私のもあげる」

「いやっほい」

すずかからもサンドウィッチ貰った。スゴイ。今日はなんか豪華だ。すごく嬉しい。食物を恵んでくれたこいつらに感謝感謝。今ならこの子らの下僕になっても良いくらいだわ。

右手にサンド。左手にいなりの構えをとる。どっちもうまー。

いやー、この後は桃子さんのシュークリームも待ってるし、ウツハウハだなー。

……と思っていた時期が、僕にもありました。

今回の敗因は、俺自身の腹の容量を見誤ったこと。今のマイボデイは小学校一年生なんだから、そんなに量は食えないのだよ。

そしてもう一つ。恐るべきはあの高町桃子だよ。

なにあのシュークリーム。ものっそい美味しいんですけど。手が止まらないんですけど。食いすぎたからちょっと自重しようと思ってたのが一口目で吹っ飛んでいったよ。

んでまあ、結果として

「うぐぐ…」

おなかいたい。

我慢できないほどじゃないから問題ない。ちょっと気を抜いたらリバースカードがオープンされる程度だ。大事無い。

横になれば楽になるだろうということでシートの上にゴロン。牛になっても構うものか。

昼飯を終えたら後は帰る時間になるまで自由時間。キャンプ場の敷地内から出ず、危ないところへいかなければ何をしていてもいいと言われている。

同級生が次々と駆け出し草原を縦横無尽に駆け回るのを耳で聞きながら、俺はうだうだと寝転がる。山の風が心地いい。おなかも一杯でだんだん眠くなってきた。もう寝てしまおう。

周りではふざけて俺のまねをして寝転がっていたなのはたちがすやすやと眠っている。上から見たら『川』の字ではなく『𠬞』の字に見えることだろう。嘘だけど。

ああ、マジで眠くなってきた。

帰って親に遠足の感想とか聞かれたら

「なのはおぶって、いっぱいご飯食べて、いっぱい寝た」

としか言えないじゃないか……………zzz。

5・お泊りですよ

「はいアナタ。あゝん」

「あーん。むぐむぐ。うんうまいぞ」

「あら、嬉しいわ」

棒読みの掛け合い。どっかのテレビドラマから引っ張ってきたような白々しい台詞だが、今は仕方ないだろう。

なぜならこれはおままごとなのだから。どれだけ違和感があるうとも、それっぽいのことをやっていればいいのだよ。

「ママー、おなかへったー」

「ああ、ゴメンなさいね。はい、あーん」

「あーん」

娘役なのはが大きく口を開け、何かを咀嚼するような動作をする。使っている食器こそ本物だが、当然ながら実際に何か食べ物があるわけではない。食べ物で遊ばない、ということか。

「にゃ、にゃー」

「はいはい。ちゃんと用意してあるからね」

猫役に割り振られたアリサが恥ずかしがりながら鳴き真似をする。十分可愛いけど、これで目の前に置かれた皿に顔突っ込んだら最高なのにな。

「アナタ、あゝん」

「うん、うまい。ほらお返した。あゝん」

「あーん」

夫婦はラブラブで食べるときは一口ごとにお互いに食べさせる、という設定。聞いた時は「あー、いるかもな」と思ってた承したのだが、如何せん実際にやってみると面倒くさい。ガキじゃないんだ

から自分で食えるだろ、という感じだ。

しかし相手のすずかはそれなりに楽しそうなので文句は言えない。でもやっぱり俺は楽しくない。

今日、というか最近雨続きで外で遊べないから、集まった俺んちでおままごとをやるうっていうのは、まあ分かる。役をあみだくじで決めるのも分かる。

だが、俺の名前から続く線が『お嫁さん』につながっていたのは納得がいかない。

なんでだろーなー。何で俺がお嫁さん役なんだろーなー？クジ運が無かったのかなー。

すずかに食べさせ、なのはに食べさせ、アリサの頭を撫でる。どうしてお母さんがここまで忙しいのか。全国の主婦の皆さん、お疲れ様です。

しばらくしてご飯の時間は終わる。さっきのは晩御飯で、予定では次は家族でまったりするのがシナリオだ。

テレビをつけて子ども向けのアニメを映し、画面からある程度はなれたところに座る。……のはいいんだけど。

何故俺が真ん中で右になのは、左にすずか、そして膝の上にアリサが寝そべっているのだろうか。お嫁さんってなんだっけ。

さて、なのはとすずかはアニメに集中しているからいいとして、問題は猫役のアリサだ。猫らしく、俺の膝の上で丸くなっている。

「……にゃあ」

目が合うと小さく鳴いた。決まった時は犬の方がいいといっていたが、恥ずかしさ的にはどっちもどっちだろう。

とりあえずただ見詰め合っているというのもアレなので、ペットにやるように構ってみることにする。髪の毛を弄ったり、あごの下をくすぐったり。

「にゃ、にゃ、ちょ……っと」

『おやおや？猫のはずなのに今人の声が聞こえたような？』などと目で問いかけると、アリサはぐっと唇を噛んで声を抑える。ままごとをやるうと言いついたのはアリサなので、責任感の強いこの子はまじめに役割を演じているのだ。

あんまりいじめすぎるのもアレなので、これからは軽く髪を撫でる程度にしておく。

ぼーっとしていると30分アニメがエンディングを迎える。キリがいいのでそろそろ次のシナリオに移ることに。

場所を変えて、現在寝室。父さんと母さんと俺とで毎晩川の字で寝ている大きめのベッドである。俺が小学校二年生くらいになったら一人部屋を与えられることになっているがそれまでは一緒に眠ることになっている。

その大きいベッドに四人して潜り込む。俺とすずかの間になのはとアリサを挟むように。ペットと一緒に寝るのはどうかと思ったが、すずかとアリサの家ではそれが普通らしいのでいいのだろう。

シーツを被り、目を閉じて眠る振りをする幼い演技派たち。小さく笑いながら、くぁ、と欠伸をする。

少しだけ眠たくなってきた。見れば彼女たちも今にも眠ってしまいそうだ。

音を立てないように枕元の目覚まし時計を操作し、一時間後にセツトする。帰宅時間のことを考えてもこれぐらいが妥当だろう。

窓の外から聞こえる雨音を子守唄代わりに俺はゆっくりと意識を沈めていった。

起きたら外がすごいことになっていた。

一時間のうちに雨脚は一足飛びに強くなったらしく、バケツをひっくり返したような豪雨になっている。家の中においてもゴウゴウと鈍い音が響いている。

この雨の中子どもが外を歩くのは危険だと判断したので、それぞれの家にお迎えを要請することになった。

アリサとすずかの家はすぐに使用人の人が出てくれて車を回してくれることになったがなのはの家はどれだけ鳴らしても出なかった。誰もいないのだろう。

仕方ないのでそれぞれの家の車に乗り込む二人を見送り、父さんと母さんが帰ってくるのを待つことにした。なのはが不安になったりしないように全力で騒ぎながら。

五時を少し過ぎたあたりで両親が帰ってきた。びしょぬれの二人にタオルを渡しつつ、事情を説明。父さんから士郎さんに携帯で連絡を取ってもらうことに。

現状、雨は時間が経つごとに強さを増し、排水路から水が溢れ出すほどになっている。車の使用もあまり褒められたことではなくなくており、外出なんて以ての外である。

なのはを除いた高町ファミリーは全員翠屋におり、やはり外に出るに出られないらしい。この雨は夜中まで止むことはないと言ってもやっている。

そうして士郎さんが家族と相談して下した決断は以下の通り。

『今日は八代さんのお宅に泊めてもらいなさい』

ウチも特に問題は無かったので、急遽なのははウチに泊まってくることになった。

ちなみにこの決定でウチの両親は大いに喜んだ。

曰く、『女の子がほしかったのよね』と。俺はいらない子だったのね。

ああ、そうか。俺がいるから二人目を作れないのか。もしかしたら職場でチョメチョメしてるかもだけど。

……おえっ。なんで両親のそういうことを考えないといけないんだよ。気持ち悪い。

ということで、なにやら随分と息巻いて夕食作りに取り掛かった母とそれに引っ張られていった父親を見て啞然としていた俺となのはだったが、思い出したように戻ってきた母にぐいぐいと押されたとある場所に押し込まれてしまった。

お風呂場である。

「ご飯までちょっと時間かかりそうだから先に入っておいて。ちゃんと面倒見てあげるのよ？あ、なのはちゃんのお着替えはどうにかするから安心して」

以上、お母さんの言い分である。

いや、どうにかするって。外には出れないんだよ？さっきからニュースで市町村から大雨洪水注意報が発令されてるって報道されてるんだよ？危ないんだよ？

色々言いたいことはあったものの、しかし俺となのはを浴室にぶち込んだ後びしゃりと戸を閉めてあわただしくどこかへ走っていつてしまったからもうダメだろう。

「……まあ、いいか。入っちゃおうぜ」

「う、うん」

言っさささと服を脱ぐ。幾つになっても男の子は脱衣が早いものなのさ。すっぽんぽんになって浴室に進む。背後から「まってよー」と聞こえるがなんとなくスルー。

我が家は自動的に湯船に水が張られて沸くシステムを採用している。お陰で手間がかからない。楽チン楽チン。

風呂ふたを開け手を突っ込んで湯加減を確かめる。個人的には大

丈夫だけどなのははどうだろうか。

と、其処まで考えた時、なのはも入ってきた。視線を向ける。

処女雪のように白くシミひとつない、年齢相応のハリのある肌。体型にメリハリなどなくストンとした寸胴ボディ。幼児特有のぽっこりとしたお腹ではないのが唯一の救いだろうか。まだ小学生なので羞恥心と言うものは持ち合わせていないのだろう。体を隠すことはしない。そのためまな板同然の『禁則事項です』や一本筋の『禁則事項だってば』が白日の下、丸々曝け出されているのだ。

……だからなんだっていう話だよ。

いくら思考が成熟しているといっても、体はもちろん頭の根底のほうもほぼ六歳仕様になっている。性的興奮とかありえないわ。

いくら俺がロリもイケるクチだとしても同じ年の子にムラムラするほど堕ちちゃいない。いや同級生とか幼馴染とか大好きだけど。

「俺は先に体洗うけど、なのはは？」

「先におふろー」

蒙古斑つきのお尻をフリフリと揺らしながら湯船に突入するなのは。湯加減の心配は杞憂だったようで、お湯に浸かったなのは気持ちよさそうな声を上げた。おっさんか。

シャワーノズルからお湯を出し体全体を濡らす。まずは頭からだな。

「すごい。ケンジくんひとりで頭あらえるんだ」

ワシャワシャと洗髪していると、バスタブに顎を乗つけたなのはが感心した風に言ってきた。

「なのははできないのか？」

「うん。体を洗うのはできるんだけど、頭はちょっと……目にあわが入るのがこわくて」

あー、うん。分かる。

どれだけ大きくなっても、石鹸が粘膜に触れた時の苦痛は薄まることはない。あの苦しみは子どもにはきついだろう。

「仕方ないな。なら今日は俺が洗ってやるよ」

「ホント!? わーい、ありがとー」

こら、お湯の中で騒ぐな。こっちに水しぶきがとぶだろう。頭にかかってそのせいで流れた泡が目にはぎゃあああああああ!

「? ケンジくん、どうかした?」

「なんでもない」

即答。

男には、意地を張らなくちゃいけないときってのがあるんだよ。涙をこらえつつ迅速にシャワーで泡を流し、気付かれないように目を洗淨。赤くなってないといいが。

子ども用の柔らかいスポンジにボディークリームをしみ込ませあわ立てる。腋や関節の内側など汗をかきやすい部位をしっかりと洗う。背中もがんばって洗う。流して終わり。

「よし、風呂から出て座れ」

「はーい」

「まずは水掛けるからな」

「ざばー」と言いながら頭からぶっかけるときゃーきゃー言いながら笑う。何が楽しいんだか。

「頭洗うから目を閉じてろ」

手に取ったシャンプーを広げてなのは髪に触れる。手触りなめらかだった。わしゃわしゃと手を動かすにつれて増えていく泡がちよっと面白い。

「ケンジくん! おでこまできてる!」

「あー、はいはい」

切羽詰った声でなのはが告げる。ぱぱっとおでこまで流れていた

泡を飛ばし、泡立てる作業に戻る。立てれば立てるほどなのは目にいく可能性も高くなるが楽しいんだからしょうがない。

「ケンジくんー、もういいよー」

「いや待て。もうちょっと。せめてアフロくらいまで」

「止めてよ！もうっ」

ああ！なのはの野郎、シャワーのコックを捻りやがった。くそう、俺の努力が水の泡に…。

「はぁ、もう一人で洗えるな？」

「うん、だいじょぶ。ありがと」

シュコシュコとボディソープを出すのはを確認して、湯船に片足を突っ込む。

「あ……」

「どうした？」

「ケンジくん、せなかもお願いしちゃダメかな」

「……いいけど」

名残惜しみながらも足を引き抜く。スポンジを受け取り、髪に泡がつかないよう気をつけながら小さい背中を洗ってやる。

「なんかもう、ここまできたら全部洗いたくなってきたな。いいか？」

「え、うん。いいよ」

了承を頂けたのでがんばってみることにする。うなじから足のつめの先まで泡まみれにしていく。

「あわあわー」

「あわあわー」

なのはは楽しそう。俺は真剣。一部の隙間もなくすほど泡立てるのに夢中になっていた。

全身を埋め尽くしそろそろ飽きた辺りで終了。シャワーでしっかり流し落とす。

「ちゃんと肩まで入るんだぞ」

「はい」

二人並んでお湯に沈む。子ども二人入っても余裕な大きさのバス
タブである。どっちかが、もしくはどっちも大人になっても大丈夫
なのを俺は知っている。ほら、ウチって三人家族だから。

そういえば俺じいちゃんとかばあちゃんとか会ったことないな、
と思っていると、ふとなのはの視線が固定されていることに気付い
た。

視線の先には、私のムスコが。

「なのは、どうかしたのか？」

「うん。えっとね、ケンジくんのそれ、なに？なのはにはついてな
いよ？」

そう言っとなのはは自分の『検閲により削除』。

「お父さんとお兄ちゃんにもあったんだけど、お母さんとお姉ちゃ
んにはないの。聞いてもこたえてくれないし……どうしてだろ」

ううむ。これは困った。子どもの純粋な好奇心が生み出した返答
に困ってしまう質問シリーズ。きっとご家族の方もうまく対処でき
なかったのだろう。俺にも無理です。

どうしよう。答えちゃおっかなー。生命の神秘から現実的な行為
の中身まで余す所なく俺の知りうる全てを伝授してもいいんだけど
なー。

よし。

「ボクにもわかんないやー」

ニッコリ笑って言い張った。白々しいにもほどがあったが、俺と
違ってピュアなのはちゃんは「そっか」と信じてくれた。罪悪
感が心地いい。

ちゃんと百まで数えて風呂から上がった。ゆでだこになってふや

けていたなのはをどうにか浴室から引っ張り出し、タオルで扇いで冷ます。うにやうにや言って気持ちよさそうだなオイ。

肌の色が戻った辺りで手を止め、文句を言われながらも本当に母親が何処からか調達してきたであろう女兒用の下着と俺の予備のパジャマを渡す。着替えまで俺がやってやったらそれはもうただの要介護者だよ。

ブルーとイエローの色違いのパジャマを着て俺となのはは、なんかもういい匂いが漂ってきているダイニングへ向かった。

それから別は大したハプニングもなく時間は過ぎていった。

やはり他所様の家ということで若干引き気味だったなのはも、両親のウェルカムな雰囲気と俺が背中を押したことで飯を食い終わるころにはすっかり満面の笑みを浮かべるほどにはリラックスしていた。

晩御飯はミートスパゲティだった。大好きです。それとハンバーグだった。大好きです。コーンポタージュもあった。大好きです。デザートにバームクーヘンが用意されていた。大好きです。

でもちよおっと豪華すぎないかなあ？こんなの俺の誕生日と同等か、下手したらそれ以上だよ。ということだよもう。でもご飯が美味しいから許しちゃうっ。

夕食を終えてばんやりテレビのバラエティ番組を見てみると、隣のなのはが眠そうに目をこすっているのに気付いた。この年頃の子どもに午後の昼寝なんて無かった様なものなんです。

しかしここで「眠いのか？」なんて聞いたら「だいじょうぶだよ」とか返ってきてそうなので、欠伸をするふりをして、

「俺もう眠いから寝るけど、なのははどうする」

「……なのはも」

声に元気がない。フラフラと揺れるなのは手を引っ張ってやりながらくすりと笑った。

母が新しくあけてくれた歯ブラシに子ども用の歯磨き粉をつけてなのはに渡し、自分の分も絞る。

「（しゃこしゃこしゃこしゃこ）」

「（……しゃ、こ…しゃこ……しゃ）」

ああもう半分寝てるじゃんこの子。ほらしっかりしろ。手を動かせ。だらしなく口をあけるな涎が垂れる。

妹の面倒を見るお兄ちゃんとはこんな感じなのだろうか、俺は思った。結局俺が歯を磨いてやった。いや、小学一年生なら親にやってもらうものだった。

半分どころか四分の三くらい夢の世界へ旅立ってるなのはの背中を押して洗面所から連れ出し、昼もきた寝室へ。

気がつくと、窓の外から聞こえる音は随分小さくなっていた。コレは天気次第で、もしかしたら夜が明けきらないうちにお迎えが来るかも、と考えながら布団に潜り込む。

すやすやと眠るなのはの寝息に俺も釣られるように瞼が重くなっていた。

本当に夜明けごろに高町一家はやってきた。

人の気配を感じて目覚めたら丁度我が父がなのはを抱き上げているところだったので大体察することができた。

玄関先に出ると桃子さんと母さんがぺこぺこ頭を下げあっていた。その隣では慎重に土郎さんへなのはが受け渡されていた。

最後は四人揃って我が家に頭を下げ、高町家は薄暗い街へと消え

ていった。……わざわざ全員で来なくても。

さ、帰って寝直そ。今日は休日だが、クラスの男子とサッカーをする予定なのだ。

6. イベントの時は下らない物でも欲しくなるから不思議

季節は夏である。

黙っていても汗をかくし、何もしなくても蝉は五月蠅い。そんな季節。

日差しの下汗を掻きながら走り回るのが気持ちいいし、庭先で虫の鳴く声を聞きながら食うスイカが美味い。そんな季節。

夏の風物詩といえば、みんなは何を想像するだろうか。いろんなものを思い浮かべては、あーでもないこーでもないと思悩んだろするのだろう。

そして、夏という季節の欠かせないものの一つといえば。

そう、夏祭りである。

「というわけで、今日は近所の夏祭りの会場を訪れています。実況は私八代ケンジでお送りしています」

「ケンジ？アンタなに一人でぶつぶつ言ってるの？」

「なんでもないよー」

疑問の目を向けてくるアリサを適当に交わしながら、しかし視線を正面に向けたまま離さない。

普段なら眉をひそめるほどの喧騒も、今なら心躍るBGMにしか聞こえない。テンションが鰻登りでこの場で飛び跳ねたくなくなるくらいだ。

ううむ。これは精神が肉体に引っ張られたのか、それとも元からこんなものだったのか。

どうでもいいか。

今はただ、目の前の戦場をどうやって駆け抜けるか。それが問題だ。

今日のために両親からもらったお小遣いはちょっとおねだりして七百円。ともにいる三人娘のお小遣いをうまい具合に誘導して使わせたとしても二千円ぐらいだろうか。

この資金の中で、夏祭りを十全に楽しめるのかと聞かれたら、なんとも答えにくい。

焼きそば、たこ焼き、クレープ、りんご飴、お好み焼き、わたあめ、ベビーカーステラ、ラムネ、フランクフルト、焼き鳥、等等。食い物だけでもこれだけあるというのに、金魚すくいやら射的やらヨーヨー釣りやら、ついつい財布の紐を緩ませてしまいそうな出店で通りは埋め尽くされている。

如何ともし難い。打つ手なし。八方塞がり。四面楚歌。へのつっぱりはいらんですよ。

俺の小さな脳みそではどうしようも無いというのが判断できたので、同行人の意見を求めてみた。

「行きたいとことか、ある？」

「わたあめ！」

「りんご飴食べたい！」

「射的よ！だれが一番か勝負しましょ！」

オーケー。いってみようか。

ポフ、と。気の抜けるような音が発せられた。

音ともに銃口から飛び出したコルク栓は、風を切らずむしろそよ風にすら押し返されそうなほどの、子どもの動体視力で捕らえきれる程度の速度で飛び、

前方約二メートルに設置された棚に並べられた的のうちの一つ。

「1」と書かれたターゲットを見事に弾き飛ばした。

「大当たりだ、坊主！一等の商品の中から好きなのを持ってけえ！」
「はーい！」

頭にタオルを巻き、ランニングシャツにステコといった風体の
厳つい顔をしたおじさんは、大口を開けて笑いながら景品を選ばせ
てくれる。

一通り目を通すことも無く、迷うことなく目的の品を掴み、念の
ためにおじさんに確認を取り問題が無いとのことなので、振り返り
手にしていたブツを依頼主に手渡した。

「はい、なのは。お目当てのものだぞ」

「わーい！ありがと！」

ニコニコと笑いつつ、俺から受けとったテディベアをぎゅっと抱
きしめる。いいことしたなあ、と充足感に包まれた。

「すずかとアリサは何か欲しいものある？一応、狙ってみるけど」

「あ、じゃあ私ねこさんのキーホルダーがいい！」

「……わたしは、別に」

そっぽを向いて唇を尖らせごによごにと口を動かすアリサ。そ
んなに俺が上手いのが納得いかないのかねえ。

三人の要望を聞いて、一番近いところから行こうということにな
り向かったのが射撃。一度に出来るのは三人までとのことなので、
まずは彼女たちに譲ることにした。

銃はコルク栓を打ち出す狙撃銃タイプ。数字が書かれた的を倒し
て別に用意された景品から合うものを選択すると言う方式。数字が
小さくなるにつれて的は小さくなり、倒して得られる景品もランク
が高い。

三人はそれぞれお目当ての品を決め、意気揚々と銃を手にした。
結果は、惨敗。あっさりと手持ちの五発を使い切ってしまった。
アリサとすずかはそもそも当たらない。惜しいところはいい

るとは思うけど、まだまだ狙いが甘い。

なのはは、当たりはするが倒れない。全弾ど真ん中にぶち当てていたのはすごいと思うが、それで倒れたらこっちは苦勞しないし、射的屋さんもおまんま食いっぱぐれちまう。狙うなら端だよね。なのははもっと銃に威力があればいい線いくと思う。

しょぼーん、とする三人娘に、またどうぞ、と追い討ちをかけて高笑いするおっちゃん。

そこで颯爽と現れる真打ち。

それはもう簡単に、ぱんぱーん、と二連続でターゲットにヒットさせてやりましたとも。得たものはおいしくてつよくなれるビスケットにひとつぶで300メートルのキャラメルでした。

その後も俺の快進撃は止まらず、最高難易度の一等も難なく倒してしまった。

「よっ」

ポン。コン。パタ。

「ガハハハ！また一等だ！やりやがったな坊主！」

「うん！それじゃあ約束のブツをちょうだい」

にゅ、と伸ばした手に小さなキーホルダーが置かれる。それをそのまま180度ターンして、それはもう目をキラキラさせていたすずかに渡す。

「くれてやる。有難く思え」

「うん！ありがとう！」

僕は君のその笑顔が見ただけで満足だよベイビー、と心の中で言っておく。自分、シャイなもんで。

さて。後一発か……

「……なによ」

「アリサはなにか取って欲しいものは無いの？」

「……ないわよ」

「そっか」

あっさりと断られてしまった。意地っ張りなアリサちゃん。

まあ、このツンツンした負けず嫌いガールが狙っているものなんかとっくにお見通しなんだけどね。まるっとすりっと。

一等の、犬の柄が書かれたマグカップ。あれが最後の獲物だ。

とれるかなー、と考えつつ、弾を装填する。流れ作業のように構えて、引き金を引く。

パコーン。

「あ、やった」

「ガハハハ！今日はもう赤字だな！もってけドロボウ！」

「じゃあお構いなく」

お目当てのお目当てのマグカップを奪取する。例によってくるっと回って後ろにいた少女に差し出す。

「ほい。あげる」

「……なんで？」

「たまたま取れちゃったから。いらないからあげる。感謝しろよ」
しっかり選び取っておいてどの口が、と思いはしたが、ここは勢いだけで乗り切ることにする。

目線を目の前にあるマグカップと俺の顔に何度も行き来させ戸惑った表情をしていたアリサだったが、焦れた様にずっとブツをさらに押し出すと、おずおずとだが受け取り、

「ありがとう」

非常に早口で、こちらを見ずに言ったので普通なら伝わらないはずだが、しかしこう見えて俺は空気が読める大人。「使ってくれたら嬉しいよ」とだけ言って、手にしていた銃をおっちゃんに返却した。

「もう二度と来るんじゃねえぞ！」

去り際におっちゃんが笑いながら言うので、

「また来年を楽しみにしています」

笑顔で返しておいた。

いやー、もうウハウハだね。こんなに上手くやれるなんて。これがビギナーズラックってやつなんだな。

その後、頬に大きな縫合痕のあるお兄さんがいるヨーヨー釣りや、サングラスをかけてスキンヘッドのおじさんがマスコットの金魚すくいの屋台を覗いて歩いた。

なのははモヒカンのおっさんが風貌に似合わない丁寧な手つきで完成させたわたあめをおいしそうに食べていたし、すずかは眼帯を装着したおじいさんが慣れを感じさせる鮮やかな動作で作り上げた輝くりんごあめをぺろぺろと舐めている。どちらもちょっともらったがうまかった。

アリサは糸目のおねえさんが職人と思えない曲芸じみた動きで仕上げたたこ焼きを頬張っている。一個ねだって食べさせてもらったけど熱いのなんの。慌てて近くで両掌に銃創のあるおばさんが売っていたラムネに飛びついた。

今はすこし火傷した舌をオカマの人が並べていたチョコバナナで冷やしているところだ。ひんやりしてて気持ちいい。それに甘い。

「あ、そろそろ時間だよ」

手首に巻いた腕時計を見たすずかが全員に聞こえるように言う。横から覗き込み長針と短針の位置を確認する……あと十分くらいだな。

周囲の喧騒がやや大きくなったのはこのことに何か関係があるの

だろうか。不規則だった人の流れが徐々に一つのほうへ向いていている。

もうすぐでこの夏祭りの大トリを飾るメインイベント、打ち上げ花火が始まるのだ。

この近くを流れる川の河川敷で、合計何発かは知らんが、とにかくドンパチやるらしい。

個人的にはただ見ているだけの打ち上げ花火よりも手持ち花火の方が好きなのだが、空に大輪の花が咲くのもまた一興だろう。意味分かんねえ。

「それじゃあ、あたしたちも行きましょうか」

「待った！」

人の流れに乗って進もうとしたアリサをポーリングしながら呼び止める。きょとん顔で振り返ると、

「何よ。いそがないといい場所とられちゃうじゃない」

「もう十分前だから目ぼしい場所を取られてるだろうし、立ち見しようにも俺らの身長じゃ見え辛い筈だ」

「じゃあ、どうすんのよ？」

「私にいい考えがある」

ということ一旦祭りの会場を離れる。花火をするはずの場所から遠ざかっているので疑問の声が出もしたが、いいからいいから、と流す。

いくら夏は日が落ちるのが遅いといっても、この時間はもう真っ暗だ。これが都市部だったら車のライトやビルのネオンなどで明るいのだろうけど、我らが海鳴市は自然を大事にする路線で売っているでそういうのはあまりない。暗い夜道は街頭が頼りになる。

「いいかいみんな、夜遅くになってから一人で出歩いちゃいけないよ。どうしても歩かなきゃいけないような場合は、出来るだけ灯り

と人通りの多い道を歩くんだよ」

「はい」

「いいからさっさと行きなさいよ」

「うわーん、アリサちゃんのいけず」

「……」

「はいごめんなさい。こっちですよー」

移動中は出来るだけ会話を絶やさないようにする。俺から見てもかなり大人びている彼女たちだが、所詮はまだ小学生。聴けば否定の言葉が返ってくるだろうが、真っ暗な道は怖いだろう。

だから出来るだけ恐怖を感じさせないように、自ら道化になって場を和ませているというのを、この子達は分かってくれるのだろうか。分かってくれなくてもいいけどね。気遣いは見返りを求めたらダメなのさ。

大体五分くらいの道程の後、到着したのはとあるビルディング。

二階部分に看板が貼ってあるけれど暗くて読めない。

「ケンジくん？ここになにかあるの？」

「うん。実はね、ここは花火が良く見える隠しスポットなんだよ」

答えつつ、がちやり、と鍵のかかっていないドアを開ける。無用心だよな。いくら海鳴が平和だからって。

入ってもいいのか、とここまで来て迷う良い子ちゃんたちの背中をぐいぐいと押して建物の中に侵入する。当然入っちゃダメなんだけど、なんかあったら連帯責任ということで一つ。

階段を昇る。壁に跳ね返って音が響く。わりと怖い。あと夜の建物というのは無条件に怖いので相乗効果だ。違うかな。

「……」

すっかりメンバーが押し黙ってしまった。下手に何か話そうものならその声に驚いて足を滑らせて階下へごろごろー、というのもある

るかもしれないので俺もシャラップ。

「とうちゃくー」

屋上の扉を開く。外を流れる涼しい風が屋内の蒸した空気で熱くなった体を冷やしていく。……ん？

気が付いたら服の裾を三人娘が摘んでいた。本当に今更。俺が目を向けると慌てて放れていったけど。

まあ、暗かったしねえ。怖かったしねえ。

空気の読める俺はここで根掘り葉掘り聞きはしない。スルーする。

「ここからなら花火が良く見えるらしいよ。すずか、あと何分？」

「えっとね……あと三十秒くらいかな」

「ギリギリじゃん」

屋上の縁をぐるりとまわって川がどの方角かを調べる。事前準備を怠りすぎたな。大体の見当をつけてメンバーを読んだ時点で残り十秒。何を話すでもなく、視線はすずかの腕時計へ。

そして、零になった瞬間視線を上に向ける。

ぱーん、と。まずは一発。赤から黄色のグラデーションが美しい花が咲く。

そこからは立て続けに。どの花火がどんな特徴なのかを詳しく見る暇も無いほどに、視界いっぱい光の粒が舞う。咲いた瞬間から消える瞬間まで目が離せなかった。

しかし、ふと、俺は夜空から目はずし、隣を見る。

そこにある三つの顔は、どれも楽しそうに嬉しそうに空を見上げていて。

また来年もここにきて、また来年もこの表情が見たいな、と思った。

出来ることなら、その先も。

そんなことを考えた自分が少しおかしくて、気を取り直すように

再び空を見る。

並んで咲くあの花々は、やはりとても綺麗だった。

7・海の青は空の青なんでしょうか

青い空！白い雲！そして煌めく砂浜！

そう、私たちはやってきたのだ！

「うーーーーーみーーーーーだーーーーー！！！」

両手を使ってメガホンにし、隣に並んだのはと一緒に腹から叫ぶ。普通なら他のお客さんに迷惑がかかるけど今回は大丈夫。なぜならここは月村家所有のプライベートビーチだから！

……プライベートビーチって、なにそれ漫画みたい。どんだけ金持ってたら買えるんだろう。

忍さんに聞いたらお金じゃなくて、元々先祖が所有していた土地を整備したんだという。どっちにしてもすごいよ。先祖が持ってた土地とか普通無いよ。いやバニングス家は外国にいくつか所有地あるらしいけど。そんなの金持ちだけだよな。

無邪気に喜んでいる俺となのは、そしてその横で呆れているアリスと優しく笑っているすずかを自愛を感じさせる目で見てから、父母兄弟姉妹からなる保護者組みはビーチパラソルとシートを敷き、ちょっと行った所にある更衣室へ向かった。子どもたちは放置でいいのかよ。

しかし海だ。さあ海だ。それにしだって海である。

なんとこれが転生してからの初海である。今まではプールとかにしか行ったことが無かったから、久々の海に妙にテンションが上がるっている。

さあさあさあさあ！思いっきり泳ごう！海水が鼻に入って地獄を見よう！うっかり大量に水を飲んでちょっとだけ吐こう！無駄に砂浜に穴を掘ろう！でっかい砂山を作ろう！なのはとかを地面に埋め

よう！こっそり海の中で小便しちゃおう！

「海いー！俺だー！受け止めてくれえー！ーあ、お前らは準備運動をちゃんとしろよ？」

「あ、ケンジくん！？」

「ちょっと！ひとりで先にいかないでよ！」

「ケンジくんも準備運動しないとダメだよー」

全部無視する。時には男は童心に帰らなければならぬ瞬間がある。それが今だ！

一瞬で服をパージし、畳んでタオルなどをいれているナップザックに押し込み、予め下に履いていた海パン一丁になる。裸足で砂浜を走るとありえないレベルで熱かったが気にせず駆け抜ける。

「行っくぞおー！とうっ……………っぷはあ、うえっ、おえ、ぐふ、げへ、おうえええええ……………」

盛大に飛び込んだら顔にある穴という穴に海水が流れ込んできた。入ってすぐで浅かったのですぐに立ち上がったが、もしここが深かったら本気で危なかった。下手すれば二度目の転生が起こるかもしれないかった。

眼球と鼻の粘膜と咽喉の奥深くが強い刺激を受けて脳みそに響く痛みを訴え続けている。お陰で吹っ飛んでた頭のネジが戻ってきたようだ。あー、気持ち悪ー。

そのままざぶざぶと海から出て、耳の奥に入った水を出そうと色々しながら三人娘たちの下へ戻る。

「ケンジくん大丈夫？」

「まったく、あんなバカみたいな入り方するからよ」

「はいケンジくん、タオルどうぞ。あ、はなみず出てるよ。はいティッシュ」

ありがとうすずか。そしてごめんねみんな。俺これからはちゃん

と準備運動するよ。

俺と同じように水着を下に着ているので、彼女たちも着ているシャツとスカートを脱ぐだけで準備は終わる。じっと見ているわけにもいかなないので、俺は彼女たちの見えない位置で四つん這いになり、軽く掘った穴に胃袋の中身をそっくり出して気分をスッキリさせた。パラソルの下に置いてあったクーラーボックスから良く冷えたお茶を取り出しごくごくと飲む。生き返った気分だ。

「ケンジくん、日焼け止めつかう？」

とてとてとなのはが寄ってくる。イチゴの柄のワンピース水着がよく似合っていた。日に焼けて後々苦しむのは嫌なのでありがたく使わせてもらう。全身に満遍なく……なく………な、く……

「無理。背中に手が届かない。なのは、お願い」

「いいよー」

日焼け止めを渡して背中を見せる。ぬりぬり、ぬりぬり。背中を撫でる手がこそばゆい。

「はい、できあがり」

「ん。あんがと」

体の表皮がうっすらと白くなった三人と並んで身体を動かす。足は重点的にやらないと。水中で攣ったりしたら一大事だからね。マングのようにジャストタイミングで助けは来ないんだよ。

しかし水に入るに当たって適当な準備運動の程度が今一分からない。なんとなく学校の体育でやる動作を一通りすることになった。ひざの屈伸、浅い伸脚、深い伸脚、ふくらはぎを伸ばし、上体の前後屈、体側、身体を大きく回し、手首足首も回す。

二人ペアになってやる運動もある。すずかと組むことになった。背中合わせになり腕を組み、お互いに身体を預けあう。

「んー。ケンジくんちょっとおもしろいー」

「まっ、失礼な子ね」

「ぐぐぐ、ケンジくんひっぱりすぎー」

「お前は全然重くないのな」

特に悔しくは無いがなんとなく、すずかを背中に乗せたままその場でぐるぐると回ってみる。

「きゃっ、え、何！？ちょ、ちょっと！ケンジくんやめてー！」

ううむ。頭のすぐ傍で発せられる柔らかい悲鳴で耳が幸せだ。こうしていつまでも回っていたいが、この行動は自分も傷つく諸刃の剣なのでそこそこでやめておく。

「うう、ぐるぐるするよー」

足元がおぼつかないようでふらふらと千鳥足のすずか。俺も揺れる視界が平静を取り戻すまでじっとしていることにした。

「何いまの！おもしろそう！なのはにもやって！」

「アタシにも！」

わーい。女の子に囲まれちゃったー。モテモテで困っちゃうなー。

……頑張れ俺の三半規管。

事前にたっぷり出していたのもあって、出すまでには至らなかった。ちょっと五体倒地で休んだら回復した。二十秒くらい。

「きゃっ、つめたーい！」

「でもきもちいいわね！」

「なのはちゃん、それ！」

「にゃっ！？もうっ、やったなすずかちゃん！お返しだ！えーい！」

「わぷっ！？ちょっとなのは、なんでアタシにかけるのよ！このお！」

「にゃー！」

「きゃー！」

実に楽しそうである。波打ち際で盛んにお互いに水を掛け合う少女たち。ここがプライベートビーチでよかった。普通の海水浴場なら今頃小さい子好きの変態どもにその肢体を舐めまわす様に見られているところだろう。まあ実害は無いだろうけど。訓練された変態にとって自らの愛する対象は絶対不可侵。その身に触れることなど恐れ多い。見ていることを悟られず、ありのままの姿をひっそりとその脳内に写し取るのだ。

しかし最近は変態の錬度も落ちてきてねー、と考えつつ、何かに憑りつかれたかのように一心に穴を掘り続ける俺。別に水の中が怖くなったわけではないよ。

日差しを受けじっとりと背中に汗が浮かぶまで穴を掘り続け、なんとか人一人埋めれそうな穴を彫り上げることが出来た。ふうー、重労働。

「わー！すごい！」

海から上がってこちらに来ていたなのはが穴を覗き込んで歓声を上げる。それにつられてすずかとアリサもやってきた。

「うわー、でっかい穴ね」

「いったい何をするの」

「ん？こうする」

すずかの素朴な疑問に、何が楽しいのかいつまでも穴の中を見ていたなのはの両脇に手を差し込み「にゃ？」穴に放り込んで改めて砂を詰めていく。

「わー！何するのー！」

「そういうことね！面白そう！」

何をやりたいのか察したらしいアリサが協力してくれる。残ったすずかは、仕方ないな、とでも言いたげな笑みを浮かべて佇んでいる。率先して参加はしていないけど止めに入ってもこないあたり、

あの少女が一筋縄ではいかなことを示している。

そして埋め立て終了。地面からよっきりと生えるなのは生首。ユーモラスだがどこか危ない気だ。

「うわーん！出してよー！」

「アハハハ！よく似合っているわよ、なのは！」

「――随分とご機嫌だな。いつから埋められるのがなのはただと錯覚していた？」

え、と声を漏らすアリサの両脇に後ろから手を差し込み、実はもう一つ用意していたりした穴に放り込み、先ほどの数倍の速度で砂を流し込む。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！おねがいだから待って！」

「いけいけー！アリサちゃんなんか埋まっちゃえー！」

生首一号が仲間を増やしたそうにこちらを見ている。数十秒で生首二号が出来上がったので、これで一号も報われたことだろう。

「あ、あれ？これいがいと本当に動けない！」

「ふっふーん。なのはのくるしみが分かったでしょ？！……だからお願い、だしてケンジくーん！」

「えー、どうしょっかなー？」

二人の目の前にしゃがみ込みにやと見守る。きゃんきゃんと騒がしい二人だが、残念、首から上だけなので迫力が無い。

危なくないように肩が少し出るくらいしか埋めてないのでしばらくは放っておいても大丈夫だろ。

立ち上がって振り向き、ニコニコと俺たちを見守っていたすずかに、

「すずかも埋まってみる？」

「いーや！」

力いっぱい拒否されてしまった。これじゃあ仕方ないよね。

「ちょっとー！あつかいが違うじゃない！」

「なんですかちゃんにはやさしくて、なのはにはきびしいのー！
って、わぁ！波が、波がすぐちかくにー！」

「こっちにはカニが！あ、あっち行きなさいよ！しっ！しっ！」
慌てふためく二人の姿があまりにも可愛らしいのですかと並んで座って見守ることにしました。

結局二人が掘り出されたのは、着替えのついでに少し離れた雑貨屋で色々な海を楽しむためのアイテムを買ってきた大人たちが帰ってきてからでした。

心配する男性陣を尻目に女性陣が記念にといって撮った写真は一生の宝物になるね。

浮き輪に尻を嵌めてぶかぶかと海面を漂う。クラゲの気持ちになってみたり。

「そんなので楽しーの？」

「そこそこー」

浮き輪にしっかりと身体を通しバタ足で移動するのには適当に答える。アリサはクロールの練習をしてるし、すずかは潜水をしているので浮き輪組みは俺たちだけだ。いや俺もいらないうちやあいらないんだけどね。

空を眺めていた視線をビーチに向ける。そこでは熱い戦いが繰り広げられていた。

砂浜でやるスポーツといったらビーチバレーだろう。高町親子チーム対八代雄飛&デビット・バニングスチーム。いい歳こいた大人たちが何やってんだか。

全員が全員見事な逆三角体型だった。しかもそれは見せ筋などで

はないらしく凄まじい運動性能を見せていた。ムキになりすぎだろ
う。

ネットなどは張られておらず、恐らくはボールを地面に落とした
ら一失点、くらいの軽いルールであるはずなのだが、その遊びが一
種の競技にまで昇華されている。

まず第一におかしい点は、ボールがはっきりとは見えない。二チ
ームの間を盛んに行き交っているはずのボールがそのカラフルな色
合いを残像としてしか見せてくれないのだ。あれでよくばん、って
いけないものだ。

第二に、普通ビーチバレーではあんなに砂煙は立ちません。誰か
が一步踏み込むごとに足元の砂が爆発したとしか言えないくらいの
勢いで弾けるのだ。

あと二段ジャンプとか止めて。いちおう申し訳程度に陣地の線を
引いてはいるけど、空中セーフとでも言うつもりか。人としてアウ
トだよ。

あとはもう、空中コンボとか、砂を使った目潰しとか、色々やっ
てるけどもういいや。わー、おとうさんすごーい、くらいの心持ち
でいよう。離れたところにいる女性陣はとくに気にした様子もない
し。

「……いいなー」

「いやあれを羨ましがっちゃダメでしょ……ん？」

てっきりあのアクロバティックな親父どもを見ていっているのか
と思ったが、なのはの視線は別のほう、のびのびと大海原を泳いで
いる親友二人へと向けられていた。

「なのは泳げないものな」

「うん。いいなー、アリサちゃんとすずかちゃん。楽しそうだなー」

……ま、こういうのも海に来た醍醐味だね。

「よかろう。ならばお前の願い、我が叶えてしんぜよう」

「え？わ、わわっ!？」

浮き輪から降りてなのは手を掴み、体から抜き取った浮き輪とまとめて二つ、ビーチに向けて投げ飛ばす。うまい具合にパラソルの天辺に乗った。

「ほれ、こうして手を持ってやるから、泳ぎの練習するぞ」

「……………いいの？」

「もちろん。さっさと泳げるようになって、アリサとすずかを驚かせてやろうぜ」

「……………うん、うんっ!」

にかっとな花が咲いたように笑うのはに、俺も心からの笑みを返した。

結論から言うと、出来上がったなのは泳ぎはあまりうまいものとはいえないものだった。

けれど水に顔をつけることがやっとだった彼女が、誰の手も借りずに十五メートル近く泳ぎきったことはその場にいた全員を大きく驚かせ、そして声高らかに彼女は賞賛された。

よくがんばったな、なのは。

8・雪やこんこ、猫やこんこ

雪が舞い落ちる。

分厚く青い空を覆い隠す灰色の天蓋。まるで雲の欠片が千切られては捨てられているかのような、不思議な光景。

「とりゃーっ！」

空は灰色。白い雪が延々と続く。そりや時間がたったら空も黒くなるだろう。なんつって。

地面は白く染まって、世界の汚れを浮き彫りにする。

「甘いわ！くらいなさい！」

季節は冬。早いようで短かったようで、けれど本当はとてつもなく長かった一年ももうすぐ終わる。これまでと変わらない一秒一秒を重ねながら。

「二人とも、よこがガラ明きだよ！」

子ども風の子元気の子。そして大人は火の子と続くのだが別に知っても得しない。覚えるだけ無駄なのである。あるよねそういうこと。まさに無駄知識。

「わぷっ。つめたーい！このーっ！」

「そんなへなちょこ玉当たらないわよーきゃん!?」

「余所見はいけないよ？」

「……ふ、ふふふ。上等じゃない。勝負よ！」

「のぞむ所！」

「もー！無視しないでー！」

「……あー、マジで風の子。むしろ台風の目だな」

今年初めての雪が降り出したのが昨日の夕方ごろ。それから絶え間なく振り続けた雪は、今朝目覚めた時には世界を銀色で満たし

ていたのだ。

積もった雪を見て無条件でテンションが上がるのが子ども。面倒が多そうだとため息をつくのが大人である。どうも俺は根っからの子どもだったらしい。

「さっむ。早く夏にならないかなー」

子どもの頃から嫌なガキだったようだ。

かまくらの中で膝を抱えて暖を保ちながら元気よく騒ぐ三人をまぶしい目で見つめた。

「ケンジくーん！いっしょに遊ぼうよー！」

「そんなところでじっとしてたら、凍って死んじゃうわよー！」

「うるせー！誰のせいでこんなに疲れてると思ってるんだー！」

着ている服はびちょびちょ。靴の中敷きからマフラーまで湿っている。脱いだら風に当たって冷えるから着たままだけど。

学校の窓から振り落ちる雪をわくわくしながら眺め「明日積もったら遊ぼう」と約束したのが昨日。そして思ったとおりになったので勢いよく家から飛び出したのが大体二時間前だ。

とりあえず道路などでは遊ぶのは危ないのでそこ以外の広い場所で遊ぶことになった。けれど近所の空き地や河川敷はすでにたくさん子ども達で埋め尽くされており、十全に楽しむことが出来なさそうだったのだ。

どうしたものかと首を捻る俺に、すずかが一言、

「じゃあウチにおいでよ。お庭が広いからそこであそぼ？」

ブルジョワ発言が飛び出した。嫉ましい。でも感謝しちゃう。

渡りに舟のその申し出に、ここぞとばかりに飛びついた。

到着した月村家、むしろ月村邸は門から玄関までは既に雪が除けられていたものの、その両サイド、庭一面は誰の足跡もついていない真っ白なキャンパスのようだった。

ジャンプして飛び込み跡をつけて喜ぶのは。ふわふわの新雪を手のひらで掬いお互いに掛け合うお嬢様方。丸めてオーバー스로ーで放り投げる俺。湧き上がる悲鳴。そして始まる三対一の総力戦。闘争の本質は数ではなく質であるということを証明するかのよう

に、序盤こそは俺が圧倒的優位に立っていた。走り回りながら敵からの攻撃から逃げ、途中集めた雪を上手く当てる。

敵も馬鹿ではない。運動神経が切れまくっているのはを後方に回し補給係とし、運動能力の高いすずかとアリサを砲台として活動させ始めた。中々いい手だ。褒めてやろう。

そして発生する不幸な事故。ノリで九十度近いカーブを決めようとした瞬間、スリップ。面白いように転がりながら俺は雪にまみれた。

そこからはもうただの一方的な蹂躪。雨霰と降り注ぐ雪球たち。いくらなのは投げ方がへっぴり腰とはいえ、十分に近づいて投げれば当たるもの。

三人が息を荒くし肩を上下させる頃には、俺の姿は白い山の中に消えていたという。

そして俺はその時埋もれていた雪を使い一人用のかまくらを作り上げ、以来ずっとそこに引き籠もっているのだ。冷たい風が吹いてこないだけで十分暖かいと知った。

「……ケンジくん、大丈夫？ふるえてるよ？」

ああ、すずかよ。心配そうに俺に声をかけてくれるのはお前だけだよ。だけど俺は忘れない。俺が転んだ時一番力強くスローイングをしていたのはお前だということを。

「アリサちゃん、なのはちゃん、ケンジくんもさむそうだし、そろそろお家入ろー」

「そうしようぜー。お前らも服濡れてるだろうし、そのままにして

たらカゼひくかもよー」

二人がかりでの真摯な説得により、いつまでも遊びを続けようとしていたのはとアリサも渋々ながら動きを休めた。

徐々にだが勢いを増してきた降雪の中を進み、屋敷の扉を開ける。木製だよ木製。きっと高いよ。

「ふいー」

「ふにゃー」

暖房が効いた室内はまるで楽園のようだった。思わずなのはと一緒に気の抜けた声を漏らしながら玄関口に敷かれた絨毯の上に寝転がる。

って、虎じゃん。

「ちょっとー、汚いわよ、二人とも」

「ちゃんと体についた雪をおとさないとだめだよ」

「はーい」

ばばほと厚着していたジャンパーの前を開いてはためくかせ、ぴょんぴょんとその場で跳ねて粗方落とす。

「お帰りなさいませ、すずか様。それにみなさまも」

「外は寒かったでしょう。温かいお茶の用意ができてありますので、良かったらどうぞ」

月村家に仕えるメイドの姉妹、ノエルさんとファリンさんがいつの間にか傍にいた。着ていたジャンパーやマフラーを渡して外套掛けに掛けてもらう。それが彼女達の仕事なのだし、なにより今の俺では背が届かない。

いやー、なんか俺も馴染んでるけど、普通家にメイドとかいないよねー。どこにいけば雇えるんだよ。コスプレじゃないやつ。

ううむ、しかしメイドさんをローアングルから見上げる機会というのも中々ないものだ。子ども時代にメイドさんがいる家の子と友

達にならなきゃ出来ないことだね。きっと流れ星を見るより難しい。ヘッドドレスがちらちらと見え隠れする感じ。意味も無くときめいてしまう不思議な感情。

「あー、ケンジくん、ノエルさんに見蕩れてる！」

「え、ああ、うん。ノエルさんって綺麗だなー、と」

「ふふ、ありがとうございます」

優しく微笑み返ってくるお礼の言葉。あしらい方にずいぶんと慣れているようだった。まあ俺も本音を言っただけだから大してダメージは負っていない。

ただし納得できていないお子様が一人。

「むー、キレイだって、なのはには言ってくれたことないのに」

「何処でそんな言葉覚えてきた」

「お姉ちゃんがケンジくんに言ってみて、って」

美由紀エ……。小学生に何言わせてんだ。妹に何言わせてんだ。

「ね、ね、なのはは？なのははキレイ？」

「うんうん、なのはちゃんは可愛いよ」

「えへへ」

適当に言っておざなりに頭を撫でてやったら物凄く喜ばれた。これが純粹さ。見るもの全てを幸福にする幸せスパイラル理論の原点。思いついた言葉を並べてみただけです。

にこやかに笑いながら先導してくれるメイドさんたちの後を、なのはの手を牽きながら追いかけた。

「あ、もちろんすずかもアリサも可愛いよ？」

「あら、嬉しいわ」

「ありがとねー」

ちよっと格好つけてみたら全然相手にされなかった。これはこれでショック。

すずかの家には薪を燃やして火を熾すような暖炉もあるらしいが、最近じゃ環境に気を使って使用を控えているらしい。この家だけ中世か。

ぬくぬくと電気ストーブの前で暖をとる。四人で肩を寄せ合っているから保温性もばっちりです。

にゃー。

にゃー。

にゃー。

……やっぱりちょっと暑いです。

月村家で飼っている大量の猫が俺達の体に纏わりついている。最初こそ可愛さに癒されたりしたがもうダメだ。暑くてたまらん。

「俺から離れろー」

にゃー。にゃー。にゃー。にゃー。

肩や膝、頭にまで上っていた猫を掴み放り投げる。滞空した猫はくるくると身を捻って着地し、何事も無かったかのようにまた俺の体の上る。

「てーい」

にゃー。

「おらー」

にゃー。

「こなくそー」

にゃー。

「ばたんきゅー」

にゃーにゃー。

永遠に続くかと思われた俺と猫との不毛な争いは俺が根負けした

ことで幕を閉じた。寝転がった俺の体の上に次々と猫が飛び乗ってくる。ちょっと重い。流石にうざい。

「誰か窓を開けてくれないか？俺の手は塞がってるんだ」

「いやよ。寒いもの」

そんなこと言わないでよアリサちゃん。犬派と公言しているから今膝の上にいる猫に構うことを躊躇っているアリサちゃん。でもちらちらと横目で伺っては恐る恐る手を伸ばしてすぐに戻し手を繰り返しているアリサちゃん。

「うう、いいなあ、ケンジくん。ウチの子たちと仲良しで」

「いいな、って。お前ん家の猫だろう。懐いてないのか？」

「んゝ、きらわれてはいないと思うんだけど、今のケンジくんくらいべったりしてくれないっていうか……ほーら、おいでおいでゝ」
やって見せたほうが早いとばかりにすずかは手のひらを差し出し猫なで声で呼びかける。その声に反応したのは俺の胸の上でふてぶてしく丸まっていた黒猫で、しなやかな動きでひょいひょいとすずかの許へ行き、

にゃー。

ぽん、と差し出された手に前足を軽く乗せ、義理は果たしたとばかりに踵を返し元いた場所に帰ってきた。

「……………ね？」

「さみしそうな顔をするな。俺が悪いことしたみたいじゃないか」
よしよし、とすずかの頭を撫でてやる。小猫が一匹が二の腕の辺りにぶら下がっていて重かったけど、すずかが嬉しそうだったんで頑張った。

「にゃー」

にゃにゃ？

「にゃーにゃー」

にー、にやおーん。

「にゃにゃにゃ、にゃんにゃん」

人間の言語を使うことを放棄したペアがいる。なのはと、なのはに両手で持ち上げられてぶらぶらしている三毛猫だ。もうなのはが可愛くて濡れそうなくらいだけど、あれは会話が成り立っているのだろうか。

え、なになに、『おい』『なんだよ』『ボタン取れてますよ』『うわマジで、新しく買ったばかりなのに』『そこは「俺たちやボタ」なんか元から無えだろ』ってツッコむところだろーがよ』だって？
ありがとう黒猫。

とりあえず一人で妄想しているのが悲しくなったんで、黒猫の首根っこを掴んでなのは目掛けてぶん投げる。

「ふにゃっ!？」

びたーん、と顔面にべったりと猫が張り付いた。いきなり視界が塞がれた事に混乱して立ち上がりふらふらと辺りに手を伸ばすのは。その手がストーブに向かった時はさすがとアリサが慌てて止めに入った。

はっはっは、これこそ助け合いの精神、美しい友情だね。

「なに黙って見てるのよ!アンタがやったんだから責任取りなさいよ!」

「あれあれ?なんでこの子離れようとしなの?剥がすの手伝ってよ、アリサちゃん、ケンジくん!」

「ほによもむむろゝ!？」

ばたばたと手を振るなのはの動きを抑えるのは一人では荷が重いらしい。やれやれ、仕方が無い。手伝ってやらなきゃならないからちょっとどいてくれよ猫さんや。

にゃー。

ありがとう。

9. 子どもが生まれたら犬を飼いなさい

「ーはい、それじゃあ今日の授業はここまで。残った時間でこの前のテストを返却します」

教壇に立ち教材をまとめながらの先生の言葉に、クラスのじやりん子どもが、えー、だの、うー、だの騒ぎ出す。手ごたえがあまり芳しくなかったのだろうか。というかテストを返されるといわれて喜ぶような生徒がこの世にいるのだろうか。甚だ疑問である。

一人ずつ先生に名前を呼ばれて答案用紙を受け取りに行く。喜び子もいれば落ち込む子もいるし、仲のいい子と見せ合って騒いでいるものもいる。

「ケンジ、勝負よ！こんどこそアタシが勝つわ！」

こんな風に。

答案を受け取ったアリサは結果を見ずに裏返したまま俺の席へやってきた。参加者が集まってからいっせーので見せ合うのだ。

「おまたせー」

「今回のテストはちょっと自信あるんだー」

なのはとすずかは呼ばれる間隔が短いので連れ添ってやってくる。すずかとアリサは基本的にどの教科もそつなくこなせる万能タイプ。成績も常に学年上位に食い込む実力者である。なのはは優劣がはっきりしてるタイプ。今回返ってきたのは数学のテストだから理系のなのはなら十分張り合えるだろう。

姓名がや行で始まるが故にいつだって俺の出番は最後のほうになる。順番が回ってくる頃に席を立ち、用紙をもらって帰ってくる。

三人がワクワクした表情で待ち受けていた。

「それじゃあ、いっせーの！」

アリサの掛け声で机の上に並べたテストをひっくり返す。

高町なのは――95点。

月村すずか――83点。

アリサ・バニングス――91点。

そして、八代健児――100点。

「のわああああああ！またケンジに勝てなかった上になのほにも負けた――！」

「やった――！アリサちゃんとすずかちゃんに勝った――！」

「うう、私がビリかあ……」

「はっはっは、精進せいよ、小童ども」

ぺらぺらと満点の答案で情けない風を浴びながら踏ん反り返る俺である。

いやまあ、俺ってほら、有り体に言って人生二週目だから。小学生レベルの問題なら、むしろ満点を取れないほうが問題なのだけだ。

だがしかし、彼女たちも真剣に勝負を挑んできたのだ。ここは勝者として尊大に振舞うのも礼儀の一つだろう。この結果も俺の過去の努力の積み重ねには違いないのだし。

「ぐぬぬ。ケンジ！アンタずるいわよ！どの教科でもあっさり百点とって！なにか秘密があるにちがいないわ！教えなさい！」

「やれやれ、アリサちゃんってば、それが人に物を頼む態度かい？というか秘密なんか無いよ。悔しかったら頑張って勉強して出直してきな」

「むき――！上等よ！明日、国語のテストがあるって先生が言ってたから、次こそ負けないわよ！」

「ね、ケンジくん。今日これからアリサちゃんのおうちで勉強会するんだけど、よかったら――」

「すずか！そんなヤツさそうこないわ！アタシたちの力だけでこいつに勝つのよ！」

「ああ、待ってよアリサちゃん〜！」

「ありゃりゃ、ごめんねケンジくん。お勉強会はまた今度ね」

吠え面かせてやるわー！と鼻息荒く教室を飛び出していく金髪のお嬢様を慌てて追いかけていくのはとすずか。

ううむ。これはちょっと煽り過ぎたかな？反省反省。

がしがしと髪を掻き、まあいいか、と結論付けて、俺も教室を後にした。

「ただいまー」

小学生の身には少々重めの扉をうんとこしょと開け、とりあえずは挨拶。例え返事が返って来ても来なくても、きちんと言う事にしている。親の教育が良かったからね。

「「おかえりー」」

と、廊下の奥から声が聞こえてくる。家の前に車が止まっていたから分かってはいたが、今日は両親の帰宅は随分と早かったようだ。帰ってきたとき誰もいないことがあるから俺は鍵っ子だったりする。

ばたばたと靴を脱ぎ捨て居間を目指す。仕事の都合上帰宅時間が不定期になりがちな両親が珍しく早く帰ってきたのだ。息子として劳いの言葉の一つでもかけるべきだろう。

廊下を進み、遮る扉を開ける。

「わん！」

犬と目があった。

子犬より一回り大きい位の、柴犬。絨毯の上で父と母に挟まれていたその犬はくりくりとした目を闖入者である俺に向けて、何を思

ったのかとことこと歩み寄ってくる。

膝を折って姿勢を低くすると丁度俺の顔と犬の顔が同じ位置に来る。近寄ってきた初対面のワンところに如何対応したものかと数瞬考
え、

「おすわり」

「わん」

「お手」

「わん」

「おかわり」

「わん」

「伏せ」

「わん」

「かわいい！」

床にぺったりと伏せた犬に飛びつき、きつくはない程度に抱きしめる。わんちゃんは嫌がるそぶりを見せることも無くごろごろと擦り寄ってきた。どうもある程度は人に慣れているらしい。

わしわしと犬っころの首筋を撫でていると、ふと両親が微笑ましいモノを見る目を向けていることに気付く。

「あらあら、ケンジったらすっかり夢中になっちゃって」

「すっかり猫可愛がりだな。いや、この場合は犬可愛がりか？」

その単語は猫限定に使われる言葉だっただろうかと考えそうになるが、しかしそれ以上に今の光景を見られたという事実に対する羞恥のほうが大きかった。

俺もうそこそこのいい歳なんですよ？見た目は子ども、中身は大人のリアル派ですよ？うわ恥ずかしい。あのバーローみたいに演技じやなくて素で喜んだのが死にたいくらいに情けない。

思わず抱いた犬の毛皮に顔を埋める俺の心情を知らず、両親はさ

らに嬉しそうにする。

「ところで、この犬はどうしたのさ」

場を進めるために、内心の動揺が表に現れないように頑張りながら問いかけた。

「ああ。今日到着の南アフリカからの船を出迎えに行った港でな、積まれたコンテナの陰に捨てられていたんだ。放っておくのも可哀想だったから、とりあえずウチに連れて来たんだ」

なるほど、捨て犬ということか。それにしても毛並みが綺麗だが、恐らくは俺が帰ってくるまでの間に風呂に入れられたのだろう。微かに石鹸の香りがする。

両親の手元には牛乳が入っていた痕跡のあるペット用の皿がある。家に着くまでの道中で購入したのだろうか。

顔を上げ部屋を見渡すと、テーブルの上に買い物袋が置いてあった。がさがさと中を覗くと、そこには首輪とリードなど諸々のペット用品が。

「ひょっとして、この子、家で飼うの？」

「いや、引き取り手を捜そうと思っていたんだが……ケンジ。お前、飼いたいのか？」

顎に手をやった父さんが尋ねる。

問われ、俺の後を追って付いて来た犬っころを眺める。そっと手を差し出すと、鼻を近づけ匂いを嗅ぎ、ぺろりと舐められた。ぞくりと体が震え、犬っころの尻尾が揺れているのが目に入った。

ペットを飼うというのはそう簡単なことじゃない。一つの命を預かるということには、とても大きな責任が伴う。そこそこ大人の俺はそのことをちゃんと理解している。

俺は、俺は。

「飼いたい、です」

「ちゃんと面倒見れるかい？」

「うん、しっかりお世話をする。散歩にもちゃんと連れて行く」

「途中で放り出したりしないかい？」

「大丈夫。責任は俺がとる」

「……生意気言いやがって、このっ」

父さんにがしと乱暴に頭を揺さ振られる。助けてと視線で母さんにSOSを発するが、しっかち受け止められた上で笑顔で無視された。ひどい。

ああ、でもなんだか安心する気がする。こうして本当にただのガキみたいに扱われるのはいつ振りだろうか。下手に中身だけが大きくなっているからこういう風にはあまり接していなかった気がする。

俺自身そう思うてしまっってことは、この両親も同じように寂しさんなんかを感じていたのかもしれない。これからは、たまにはこんな感じで歳相応に触れ合うべきなのかもしれないな。

「アナタ、それくらいにしてあげて。ケンジの髪がぐしゃぐしゃじゃない」

無骨な親父の手が離れ、代わりに母の柔らかな手が頭に触れる。丁寧な手つきで手櫛で髪を整えて、袋から取り出した首輪とリードを俺に手渡してくれる。

「ケンジが飼い主なのだから、ちゃんとつけてあげてね」

「はい」

赤い首輪を広げ、犬の首に巻きつける。言われるより先にお座りしてくれるこの子はとても賢いのではなからうか。

苦しくないようにそこそこの力加減で締め付けて、少し離れたところから視て出来栄に惚れ惚れする。

「よし！それじゃあこれからなのは達のとこに行って自慢してくる！」

「おう、行って来い」

「車には気をつけるのよ」

「分かった！よし行くぞ、えっと……」

玄関へ向けてもう半分以上進みかけていた体を引き戻して、改めて両親のほうに向き直る。

「コイツ、名前は？」

「分からんな。捨てられていた箱にも何も書いてなかったし」

「もうアナタが飼い主なのだから、ケンジが決めていいのよ」

「よし、じゃあ行くぞ、ポチ！」

「わおん！」

古来より受け継がれてきた定番の名前。すでに手垢がつきすぎてむしろ誰もつけないんじゃないかと考え、以前から常々もし犬を飼うことがあったらこう呼びたいと思っていました。

「わぁー！カワイー！」

「そうだろうそうだろう」

「本当にケンジくん家で飼うの？」

「うむ。ペットは飼ってみたいと思わなかったわけじゃないからな。

棚からぼたもちだ」

「それは、ちょっと違うんじゃないかなあ……？」

「……………」

「で、アリサはいいのか？触ってもいいんだぞ？」

「……別に。勉強してるし」

「まったく、強がっちゃって。ちらちらこっち見てるのはバレてんだぞ。よしいけ、つぶらな瞳で見つめる、だ」

「わん」

「……なによ、そんなの」

「（キラキラ）」

「……ふ、ふん！そんなの別にどうってことないし！」

「（キラキラ）」

「……だから、その」

「（キラキラ）」

「……えっと、あの」

「（キラキラ）」

「……うう」

「（キラキラ）」

「もー！そんなに見るんじゃないわよー！」

「きょう！？」

「このこのっ、きれいな目エしちゃってさ、この！可愛いわねもう！
アンタ、ウチの子になっちゃいなさいよ！」

「わー、アリサちゃんすごく楽しそう」

「あいつはワンころが大好きだからな。つかおい、ウチの子を誘惑
しないでくれ」

「いいじゃない別に。ほーら、アンタもウチの方がいいでしょー？
広いし、ともだちもたくさんいるわよー？」

「やめろ、お前ん家と俺ん家を比べるな。とにかくその子は渡しま
せん。代わりと言っちゃあなんだが、一緒に遊ぶ時はそいつも連れ
てくるから。それで我慢しろ」

「むう。しょうがないわねえ。今日はこのくらいで勘弁してあげる
わ」

「明日も明後日も無いからな」

「あ、そうだケンジくん、この子、お名前は？まだ教えてもらって
ないよ」

「ああ、ポチってんだ。在り来たりだが、逆に新しいと思ってな」

「あれ？でもこの子、女の子だよね？」

「え」

え。

10・進路の話をするゝ鬼の腹筋が攣る

二年生になった。

と言っても大した変化があるわけでもない。クラス替えはなかったし、授業の内容も相変わらず欠伸の出るようなものばかりで、強いて言うなら教室の位置が玄関から遠くなったくらいだ。

とか何とか枯れてることを考えているのは当然のように俺だけで、同学年の子たちはそわそわと浮き足立っている様子だ。進級できたことが嬉しい様子。後輩も出来たしねー。お兄さんぶったりお姉さんぶったりしたいんだろう。

精神年齢大人の俺から見ればどっちもどっちの可愛らしいガキ共なんだけど。

でも子供ってやっぱり成長するのが早いね。ちょっと前まではどいつもこいつも同じように遊んで騒いでいたというのに、今では外で遊ぶ子、本を読む子、男と女に分かれてちよつと衝突していたり、中々どうして情緒豊かになっている。

「なによ！私たちが先に遊んでたんじゃない！」

「うるさい！女子はあっちいけよ！」

やれやれ、今日もまたどこかで諍いが起きる。何故人は争わずにはいられないのだろうか。とか何とか。

場所は学校の運動場。休み時間に遊んでいた二つのグループがいちがみ合っている。とかどっちもウチのクラス。男子と女子のグループのリーダー格がにらみ合っている。

男子リーダー、佐々木勇氣。女子リーダー、アリサ・バニングス。二人とも性格は明るく社交的。リーダーシップを発揮して周囲を引っ張っていくタイプだ。ちなみにどっちも顔面偏差値勝ち組だっ

たり。

もうちょっと大きくなれば二人とも争うことなくお互いにとっていい落としどころを見つけて仲良くできるんだろうけど、生憎と今は多感な時期なのだ。こんなこともままあるだろうね。

とは言っても黙って見ているのは性に合わないので、同じように心配して仲裁に向かいそうだったすずかに目配せしてから二人の間に割って入った。

「おいおい、お前ら。ケンカなんてしてんなよ」

「わるいのはこいつらよ！あとから来たくせに割り込んできて！」

「なんだよケンジ！女子の味方するっていうのかよ！」

さし合わせたようにほぼ同じタイミングで噛みついてくるが、同時に窺うような視線を向けてくる。彼らの後ろに控える子たちも似たような感じだ。

俺のクラスでの立ち位置は中立派、強いていえばバランスーだ。男子ではあるが女子のリーダー的存在であるアリサと親しく、何より男だから女だからと騒いだりしないので自然と二つの勢力の間を受け持つ役割を果たしている。

ケンカが起こればそれを止めて悪かったことを反省させる。言ってしまえば簡単だがこれが意外と難しい。どちらか一方の肩を持つことのない公平なジャッジを要求され、そのことをしっかりと理解させる必要がある。こういったことを数回繰り返すうちにクラスの中ではある傾向がみられるようになった。

争いが起きれば八代健児に頼る、というもの。みんな頭ではケンカはよくないとちゃんとわかっている。けれどまだ未熟な精神ゆえにどうしてもぶつかってしまう。

何が悪くて何が良いのか。どちらが悪くてどちらが良いのか。お子様の彼らにはまだわからない。わからないからそれが判断できる

俺に頼る。子供にしてはよく考えられていると言えるだろう。

「やかましいわアホ共！ケンカせず仲よく遊べ！そして俺も混ぜろ！」

しっかりとした大人の俺でしかできない大役といってもいい。どうだ。争っていた二人が啞然とした顔をしている。

「ケンジくんケンジくん、それはちょっと違うと思うな」

と、後ろのすずかが苦笑気味に言ってくるが、ちょっとよくわからないです。

すずかも俺と同じ中立派。同級生に比べてちょっと大人びている彼女は子どもじみた争いはしない。俺と違って積極的にケンカに介入したりはしないが、目の前で起こっているようなら止めに入るし手におえなければ俺を呼ぶ。そんな感じ。

「そーだよー。それにケンジ君はなのはのつくんに付き合ってくれるって約束したの」

くちびるを尖らせてぶーたれてるのはまた違った意味で中立派。正確にはそもそもいつには勢力争いという考えがない。まだ男女の垣根というものが分からないのだ。みんな仲良くがこいつの理想である。眩しい。

「何が特訓だ。あやとびの練習くらいでそんなかっこいい言葉を使うな」

「なのはにとってはそれくらい大変なことなの！修行といってもいいくらい！」

「よくない」

体育の時間にちゃんとべなかつたのはこうして小学生にとって貴重な休み時間を消費して努力を続けているのだ。いつも一緒にいる俺とすずかとアリサがひょいひょいできたから自分だけうまくいかないのがくやしいのだろう。かわいいやつだぜ。

頬を膨らませるなのはほっこりしていると、その姿に毒気を抜かれたのか勇気とアリサの表情から大分陰がとれている。これならこちらの言葉もすんなり受け入れられるだろうと判断し、口を開く。「勇気よ。手に持っているボールを見るにサッカーをしようとしていたのは分かるし、それなら確かにそこそこの広さがあるのも分かる。でもお前らの人数は少ない。その分使う広さも少なくなるだろう。ここの一つしかないゴールはもう上級生が使っているんだし、できるのがボール回しくらいならなおさらだろう」

「うぐ、そ、そうだけど……」

「何より女の子に怒鳴り散らすのは男らしくない。格好悪い。ださい」

「なん……っ！」

がっくりと項垂れる勇気。この年ごろの子どもはヒーローとかに憧れているから格好悪いことを嫌うので、こういったときや大体なるとかなる。

「そしてアリサ、お前もだ」

「なによ、私はひがいしゃよ」

「同じように怒鳴りあっていたから同じだ。あんな振る舞い、レディとはいえないな」

「むむ」

アリサの家はマジで上流階級っぽいので、振る舞いとか嗜みとかレディとか乙女とかいっとけばどうにでもなる。

「ほれ、それぞれ悪かったところがわかったな。それじゃあ次にすることはなんだ？」

「……ごめんなさい」

「……こっちこそ、ごめんなさい」

「よろしい」

これにて一件落着だ。成り行きを見ていたクラスメイトたちがぱちぱちと拍手を送る。いえーい、とピースで答えた。なんだったら上着を肌蹴たいところだ。桜なんて舞ってないけど。

「ケンカも終わったならあとは目一杯遊べよ。分かれて遊んでも混ざって遊んでも、全員でなのはの監督をしてもいい」

「やめてよっ」

ここにいる男女合わせて十一人で輪を作り、その中心でなのはにひたすら跳ぶ練習をさせる図。最高だと思うのだが。

「そんなことになったら、なのは泣くよ！？わんわん泣く！」

「その時は頭撫でて泣き止ましてやる」

「え、頭なでなでしてくれるの？それじゃあ、わ、わーん」

「ウソ泣きにしても下手すぎる……」

でも顔を覆った手の間から期待するようにちらちらと俺の顔をうかがうのはちゃんがかワイ過ぎるのでお願いを聞いてしまう。なのは、恐ろしい子ッ！

3年生になった。

クラス替えがあって離れてしまった友達はあるものの、そういえばクラスに関係なく仲のいい奴らは割かし多かったので大して変化があった気もしない。

大きな変化としては携帯電話を持つことが許されたことと自分の部屋が出来たことくらいだろうか。

保護者たちのお茶会で話し合った結果、なのはとアリサとずかと俺は同じタイミングでケータイを購入させてもらった。小3で持つのはちょっと早くね、とは思ったものの、あいつらは年の割にはしっかりしているし、フィルタリングもちゃんとかかっているし、

何より俺がしっかりと監督すれば大丈夫だろう。

ちなみに新たに個室が与えられたのは俺となのはだけ。ほかの二人は随分前から一人部屋が与えられていたらしい。ブルジョワめにらんでやる。ぎろり。

「あ？何ガンつけてんのよ。やる気？」

淑女らしくしろよおぜうさま。なんでそんなヤンキーみたいな反応をするんだよ。というか目力半端じゃない。お弁当のアスパラベ—コン巻きを咀嚼しながらも俺はきちゃん玉袋が竦みあがるのを感じた。あ、チーズ入ってる。

「まあ、どうせバカなこと考えてたんでしょ。そんなことよりもちやんと考えなさいよ？将来のこと。なのはもね」

そうなのである。さっきの授業で先生ってば面倒くさいことを言い出したのである。

いや、普通ならここは子どもらしく『パイロット』とか『お花屋さん』とか『宇宙飛行士』とか、そんな夢を描くべきなんだろうけれど、目の前にいる奴らときたら、

「いっぱい勉強して、パパとママの会社を継ぐ」

「工学系の専門職が良い」
ときたもんだ。

恐ろしい！憧れを持たない、いや持てない子どもは恐ろしい！

目標を決めるのはそりゃあ早い方がいいだろう。実力をつけるのに十分な時間があるに越したことはない。その一環として三人娘は塾に通ってめきめきと学力を伸ばしている。まだ俺の方が上だけど、いつまでそうして偉そうにしてられるだろうか。なにもしてない俺ならば、早くても中学生くらいにはこいつ等か或いは他の誰かに越されるだろう。そうなるのも癪だからちょっとは頑張ろうと思うけど。

中高一貫だからそこまではいいとして、大学受験やだなー。もう二度とやりたくないなー。

「アホのケンジはいいとして。なのははどうするの？やっぱり喫茶翠屋の二代目？」

「うーん、それも将来のヴィジョンの一つではあるんだけど」

話題を振られたなのは、なんだか憂鬱そうな表情をしていた。というか俺はなのはが『ヴィジョン』とかかっこいい単語を使いこなしているのに驚いた。塾通いってすごい。

「他にやりたいことがあるようなないような、はっきりしなくて。

……私、特技も取り柄もあんまりないし」

「このバカチン！」

ぺたり、と。なのはの頬にレモンの輪切りがへばりついた。投げつけたアリサはぶんすかしながら、

「自分からそんなこと言うんじゃないの！」

「そうだよ！なのはちゃんにしか出来ないこと、きっとあるよ！」

こればかりはすずかも一言物申したかったようだ。なんて友達思いのいい子たちだろうか。

「大体アンタ、理数の成績はこのアタシよりもいいじゃない！それで取り柄がないとかどの口が言うのよ！」

「あーう」

ぐにぐにと伸び縮みするなのはのほっぺ。そろそろ周囲の目が厳しくなってきたので介入しようか。

落ちたレモンを齧りつつ、

「落ちてよアリサ。なのはに負けているのは理数だけだろう。文系と体育ではそいつはぽんこつだ」

「そうね！理数も文系もアンタが一番だものね！」

「そうかっかするなよ。あともう放してやれ。だるんだるんになっ

て戻らなくなるぞ」

「あ、ごめんなのは」

ぱっと手を放すとぷるんとした弾力性を見せて戻るほっぺ。あうあう言いながら頬をさすっているのはに向かって、

「なのはも、あまり自分を卑下するのは感心しないぞ」

「ひげ？おひげなんてなのは生えてないよ」

難しい言葉を使った俺が悪いが腹が立ったので一発ぶっておく。

「自分に取り柄がないなんて言うなってことだ。なのはにだっていいところはたくさんある」

「ホントに！？たとえば、なに？」

期待するようなキラキラの瞳で見られると無駄に緊張するな。特に考えなしに喋っていた俺は少し頭を悩ませて、

「（にっこり）」

精一杯の笑顔を浮かべた。

「なにか言ってよ！」

涙目で騒いでいるなのはちゃんってば可愛いなあ。

「まあ、半分くらいは冗談として」

半分！？、と驚いたようなのはの鼻をつまんで、

「取り柄がないとか、決めつけるのにはまだ早いんじゃないの。お前はまだ9歳なんだから、まだまだ知らないことがたくさんある。

時間をかけて、いろんなことをやってみて、諦めるのはそれからでもいいんじゃないのか」

「……ふあい」

「なんだその返事は。ふざけているのか」

「にやらその手をはにやしてよ！ふぎゃっ、ひっふぁんにやいで〜！」

ぴーぴー喚くのはには、もう将来のことで思い悩んでいるような影は見当たらなくなっていた。

「やるじゃないケンジ」

「流石ケンジくん、だね」

なんてことはない。お昼休みに発生したこのぷち騒動は、友達を元気づけるのが目的だったのだ。

「アリサちゃんもすずきやひゃんも、見てにゃいで助けてよー！」
当の本人は気づいてないけどな。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~243

魔法使いへ到る道

2015年04月07日 11時44分発行